

平成29年度

研究報告集

子ども一人一人の将来の生活を見据えた教育や支援・手だてについて

～個別の包括支援プランを根幹に据えた子どもの継続的なキャリアアップを目指す～

平成30年3月

京都市立西総合支援学校

はじめに

本校は昭和61年4月、多くの保護者や教育関係者の熱い願いの中、京都市で6校目の養護学校として誕生しました。平成16年からは地域制・総合制の学校として新たなスタートを切り、間もなく14年が経過しようとしています。

平成16年の養護学校の新設・再編時には、障害のある人もない人も共に学び、共に暮らす共生社会の実現に向けて、「障害種」「学校」「学校種」の3つの場を超えろという取組をはじめました。肢体不自由の子どもと知的障害の子どもが同じ教室で学ぶ学校であり、毎日のように地域に出かけ、学校でできることを地域でも発揮する授業を展開し、小中学校との交流及び共同学習を積極的に行い、特別支援学校のセンター機能として地域の小中学校に在籍する障害のある子どもの支援を行う学校です。

また、地域の障害のある子どものセンターとして他校種との連携も深めてきました。平成17年には特別支援学校として全国で最初に学校運営協議会を立ち上げ、「双方向の援助 ～新たな地域の創造～」というテーマを基に、地域との連携協働も進めてきました。子どもたちは地域に生きる一人の生活者です。地域の中で、自分の「できる」ことを活かし、生き生きと生活する姿を思い浮かべながら、学校の中で、地域の中で、教育活動をすすめてきました。

この14年を振り返りますと、障害者権利条約の批准にともなうインクルーシブ教育システム構築という新たな教育課題の先駆けの取組でもあったように思います。これからも課題を明確にして、さらに取組を継続していく必要性を感じています。

これら本校の取組につきまして、ご一読いただき、忌憚のないご意見・ご感想、並びにご指導をいただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本年度の研究にあたり、ご指導ご助言いただきました京都市教育委員会指導部総合育成支援課 浅野理々指導主事をはじめ、多くの諸先生方に深く感謝の意を表します。

京都市立西総合支援学校

校長 富家直樹

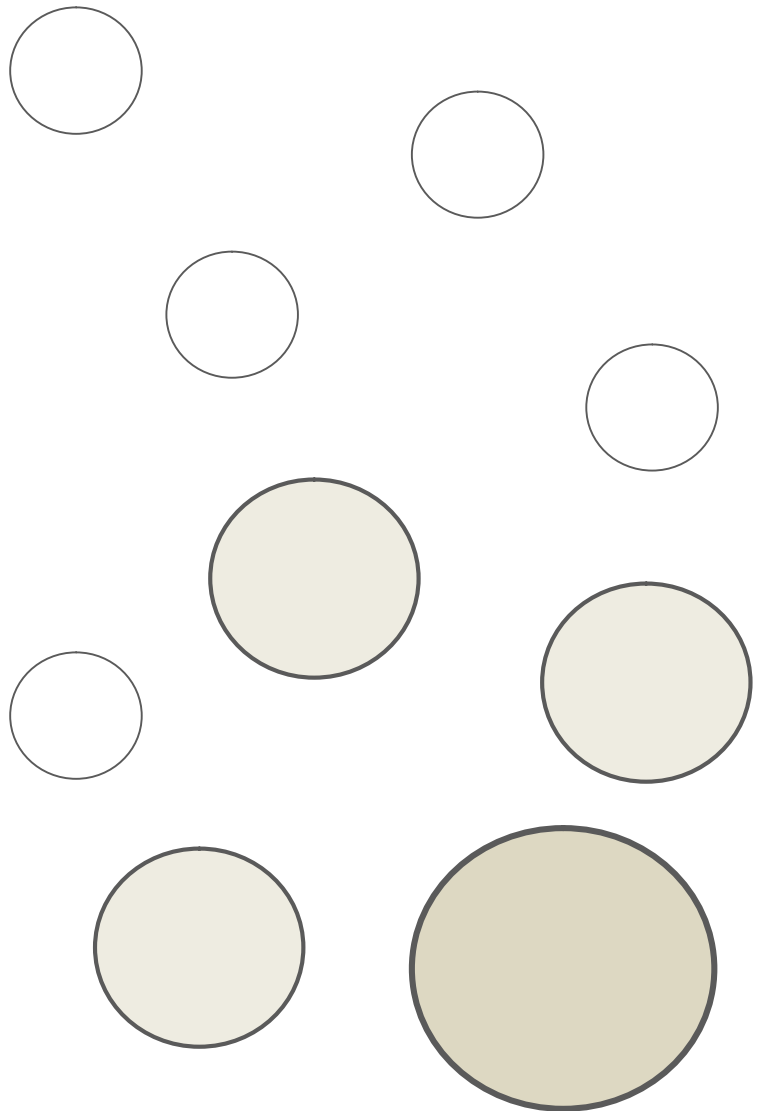
目 次

はじめに

I	研究について		
1	研究の経過	・ ・ ・ ・ ・	3
2	研究テーマ	・ ・ ・ ・ ・	1 1
3	研究組織	・ ・ ・ ・ ・	1 3
4	研究内容・方法	・ ・ ・ ・ ・	1 5
II	小学部の取組		
1	研究テーマ	・ ・ ・ ・ ・	2 2
2	研究報告	・ ・ ・ ・ ・	2 6
3	成果と課題	・ ・ ・ ・ ・	4 1
III	中学部の取組		
1	研究テーマ	・ ・ ・ ・ ・	4 2
2	研究報告	・ ・ ・ ・ ・	4 4
3	成果と課題	・ ・ ・ ・ ・	5 7
IV	高等部の取組		
1	研究テーマ	・ ・ ・ ・ ・	6 0
2	研究報告	・ ・ ・ ・ ・	6 2
3	成果と課題	・ ・ ・ ・ ・	7 7
V	支援部の取組		
1	研究テーマ	・ ・ ・ ・ ・	7 8
2	今年度の取組	・ ・ ・ ・ ・	8 1
3	今年度の成果と来年度の方向性	・ ・ ・ ・ ・	8 6

おわりに

I 研究について



I 研究について

1 研究の経過

(1) これまでの研究経過

本校では、開校当初より「子どもは適切な支援があればさまざまなことができる存在である」ということを大切にしてきた。子どもの「できる」を育むために、校内での授業実践だけでなく家庭や地域にも学習の場を広げ、どんな場面でも子どもたちの「できる」姿が発揮できることを目指し、授業実践を進めてきた。

ここでは、次年度の第2回地域制総合制支援学校4校合同研究発表会を見据え、平成16年度養護学校再編以降の本校の研究の経過についてまとめておく。

京都市においては平成12年度から3年間「文部科学省教育研究開発学校」の指定を受け、さらに本校においては、平成14年度からの3年間に渡って京都市教育委員会より「みやこ学校創生事業」の研究指定を受けて研究に取り組んできた。

再編後、平成16年からの3年間、本校においては「個別の包括支援プラン」から導き出された短期目標をもとに、どのようにカリキュラムやユニットを編成し、どのように授業実践に反映させていくかということや、3部制（総務部・指導部・支援部）での学校組織運営システム作りなどについての研究を行った。

平成19年度に入ると、再編の理念にもある「障害のある子どもたちを地域に生きる一人の生活者として捉える」教育実践の展開、学校・家庭・地域の連携、地域資源の活用など、地域へ広がる教育実践が各部研究の主流となってくる。

平成21年度には、それまでの研究経過を踏まえ、「キャリア教育の観点に基づく児童生徒の学習（進路指導）の推進」、「地域資源の利用の推進」の2点が学校全体の取組の柱として打ち出され、以降、本校においては「キャリア教育の観点」を取り入れ、小・中・高等部における実践の縦の繋がり（学習の系統性）を意識した研究が推進されてきている。さらに、平成23年度からは児童生徒の継続的キャリアアップを図るために、大学の協力のもと「できますシート」※を用いた研究実践を、翌24年度には、切れ目のない継続的な指導支援・情報移行を目指し、「情報バンク」※開発の取組をスタートさせ、今日に至る。（※ 「4 研究内容・方法」の項参照）

平成27年度の地域制総合制支援学校4校合同研究発表会において、本校は「地域資源を活用した教育実践」をテーマに研究報告を行った。

以下に再編以降の研究テーマと内容の変遷を表で示す。

H	研究テーマ他	小学部テーマ	中学部テーマ	高等部テーマ	支援部テーマ
16	<p>「社会参加と自立を目指したインクルーシブ（包括的）な教育の推進」 ー「個別の指導計画」（京都市版）より導き出された教育課程による実践と 「地域における特別支援教育センター」のネットワーク方法論の開発ー</p>	<p>身近な人やものに自らかかわり楽しむ</p>	<p>「個別の指導計画」（京都市版）に基づく授業の実践 （4つのカリキュラム編成） ～カリキュラムユニットへの移行～</p>	<p>個別のニーズに応じた学習内容や活動を以下に保証していくかという ことを目指して取り組んだ（本文抜粋）</p>	
	<p>平成16年度京都市教育委員会『みやこ学校創生事業』指定校最終報告 『第35回博報』『文部科学大臣奨励賞』ダブル受賞記念</p> <p>●「個別の指導計画」（京都市版）より導き出された教育課程による実践 ●システム作り ●「地域における特別支援教育センター」のネットワーク方法論の開発 ●研修について ・校内研修 肢体不自由児童生徒の支援についての研修（全体研修） 個々の教員のニーズに合わせた研修（自主研修：学習会） ・学部・学年研修 ・地域の小・中学校を対象とした研修（総合育成支援教育研修） ・コーディネーター研修</p>	<p>・低・中・高のまとまりでのカリキュラムの工夫 ●児童の目標に迫るための学習作り ●居住地校学習に向けての取組</p>	<p>●カリキュラム編成 ●学習グループ編成の仕方 ●学習を企画・立案するシステム ●ケース会議の充実</p>	<p>・高3肢体不自由生徒の移行支援 ・「障害種による場の教育を超える」指導の実践 ・課題別学習の取組</p>	<p>●センター機能の充実をめざす支援部の取組 ・個別の教育支援計画 ・特別支援教育コーディネーター ・広域特別支援連携協議会 ●校内支援と地域支援を担うセンター機能の一体的な運用 ・関係機関連携 ●LD等児童生徒への地域支援の取組 ・学校サポートチームの設置</p>
17	<p>「個別の包括支援プラン」から「授業づくり」へ ～個のニーズに応じた授業の展開をめざして～</p>	<p>『個別の包括支援プラン』をもとに目標からどのようにカリキュラムを編成して学習を作っていけばよいかーユニットを編成する過程と授業づくりを大切にー</p>	<p>カリキュラムベースに基づく授業作り ～学部の縦割りライフスタディを中心に～</p>	<p>個別の包括支援プランを基に個々の課題を明確にし、達成するための題材、教材の開発 ～環境設定、手だて、支援のあり方の検証～ （高等部2年）</p>	
	<p>創立20周年記念</p> <p>・学校運営協議会設置（コミュニティスクール指定）</p> <p>●研修について ・校内研修（全体研修／自主学習会など） ・コーディネーター研修会</p>	<p>●児童の現在の姿から目標や学習内容を考える ●ユニット編成に関するケース会議の持ち方 ●カリキュラムベースをもとにしたユニット編成 ・発達を踏まえた目標設定 ・実態に合わせた題材 ・学習の場の拡大 ・かかわる人を広げる</p>	<p>●カリキュラムベースを基にしたユニットの編成 ●ユニットを基にした学習とその事例 ・レンタルショップでの活動（課題分析アセスメント表） ・ワークスディを選択しないグループ ●エッセイ会議のあり方 ●カリキュラムコーディネーターの役割</p>	<p>・授業改善 ・社会経験を積み、広げて、将来の生活につなげる ・将来の暮らしや人生を豊かにしていくために必要な力を養う ・自立活動の取組 ・公共交通機関利用</p>	<p>●新たな、包括的なネットワークの構築を目指して ●地域ぐるみの教育の推進 ・ボランティア養成講座（出張ボランティア養成講座） ・LD等サポート ・育成学級サポート ・地域ネットワークの構築 ●地域におけるリソースの活用 ・芝生グラウンドや体育館の活用 ・放課後の地域サポート ●特別非常勤講師とのコラボレーション（外部専門家の活用について） ●大学との協働研究 ・効果的な教育研修プログラムの開発 ・地域生活スキルの向上を目指したプログラムの開発</p>

H	研究テーマ他	小学部テーマ	中学部テーマ	高等部テーマ	支援部テーマ
1 8	「個別の包括支援プラン」から「授業づくり」へ ～個のニーズに応じた授業の展開をめざして～	ユニットの編成についての 検証と目標に迫るための工 夫された授業づくり	カリキュラムベースに基づ く授業作り ーユニットの充実ー	よりよいカリキュラム (教育課程) 作りを目指 して 一個々の生徒の多様な ニーズに応じた授業の 組み立てユニット編制 の充実ー	総合制養護学校教員の意識 改革と指導力の向上をめざ して ～専門性向上をめざした研 システム(研修体制) づくり～
	<p>コミュニティ・スクール フォーラム2006 報告集 西総合養護学校 コミュニティ・スクール構想 ～連携協働の教育機能の推進を目指して～</p> <p>・KES 学校版「環境に優しい学校」認定</p> <p>●研修について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新着任者研修 ・全体研修 ・テーマ別研修 ・グループ別研修 ・発達に関する研修 ・コーディネータ研修 	<p>●目標に適した学習集団づ くり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユニット編成の修正 ・ユニットにおける学習内容 の検討 ・個別の週予定表 ・グループ学習の記録(評価) ・連続性と継続性の系統図 <p>●地域に広がる実践</p> <p>●学部研修会</p>	<p>「集団化・社会化」</p> <ul style="list-style-type: none"> ●ケース会議の開催を保護 者に積極的に働きかける ●ユニット担当者会議を定 期的におこない、ケース会 議で話し合われた課題を もとに授業の振返りと見 直しを行う ・保護者参画のケース会議 ・ユニット担当者会議で授業 の見直し ・就労に向けた取り組み ・学部研修 	<p>●「地域社会で暮らす生 活者」の視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・居住地区に住む生徒の ユニット編成(1年生) ・進路・卒後に向けての ユニット編成(2年生) ・自己決定と自立した生 活への取組～セルフマネ ジメント～ (3年生) 	<p>●社会参加と自立の観点か ら、専門性を活用した「個 別の包括支援プラン」に基 づく支援の推進</p> <p>●組織コーディネートの観 点から、指導部との連携を 図った支援のあり方の分 析・検証・実践</p> <p>●高い専門性に基づいた「育 支援センター」の校内・地 域に向けた一体的な相談 支援の実施と、特別な教育 ニーズに即応できるセン ター機能のさらなる充実・ 発展</p> <p>●連携・協働の観点から、校 内・地域への一体化した支 援を拡げ、つなげる双方向 のサポートシステムの実 現、及び地域ぐるみの学校 づくりをめざすコミュニ ティ事業の推進</p> <p>・総合養護学校教員の専門 性に関する評価シート</p> <p>・センター機能 「学びの広場」 「チャレンジ・タイム」</p> <p>・放課後ほっこりプロジェクトわ くわくクラブ(9月～)</p>

H	研究テーマ他	小学部テーマ	中学部テーマ	高等部テーマ	支援部テーマ
1 9	個別の包括支援プランに基づく子どもの地域の生活を見据えた教育・支援 ～共同と協働～	ユニットの編成についての 検証と目標に迫るための工 夫された授業づくり	学校・家庭・地域の連携を図 り、生徒の生活する力をつけ る	多様な経験を通して、役 割を担うことを学び、一 人一人の自分らしい生 活をめざす（学部テーマ）	
	「京都市立西総合養護学校」から「京都市立西総合支援学校」へ 名称の変更 ●子どもの地域の生活を見据えた教育・支援について ●「交流」と「共同」「協働」について ●研修について ・全体研修 ・グループ別研修 ・テーマ別研修 ・コーディネータ研修	●カリキュラム・ベースを利用した短期目標の確認と見直し ●ユニット学習内容の検証・PDCAサイクルで授業の見直し ●地域につながり広がる居住地学習の推進 ・居住地校転校支援プログラム ●子どもの発達を踏まえた授業づくりについての学習会の実施	●学校のある地域での取組 ・地域資源を活用する学習 ・地域を知る学習 ・学校間交流 ●活動地域での取組 ●居住地域での取組 ・居住地ごとのイベントでの学習 ・個別のねらいに応じた校外学習 ●居住地校交流	●指導者の支援のあり方 ●ジョブ・システムに学ぶ ●高等部生徒の個別の包括支援プラン ●一人一人の活躍の場を開拓する ●活躍できる場を学校外に求めて	●小学校への支援を通しての取組 「保護者学習会」 「チャレンジ・タイム」 「学びの広場」 ●関係機関連携ネットワーク ・リハセンPT 観察指導 ●地域ぐるみの総合的な支援・人材育成 ・ボランティア養成講座 ・わくわくクラブ ・かつら川ふれあい祭り ・R大学地域活性化ボランティア ・芝生まつり スタート ・もちつき大会
2 0	子どもの地域での生活を見据えた教育・支援について ～個別の包括支援プランに基づく共同と協働～	目標に迫るための工夫された授業づくり ～できる状況づくりと支援～	生徒が地域で自ら活動するために必要な活動パッケージ作り	卒業後の生活を想定し、生徒自らが地域で生きるための手立ての開発	地域支援と校内支援の充実と一体化の推進 ～子どもたちへの総合的な支援の実現をめざして～
	●研修について ・全体研修・新着任者研修 ・グループ別研修 ・テーマ別研修 ・コーディネータ研修 ・総合育成支援教育研修会（公開研修会）	●短期目標の確認と見直し ・全盲の児童の事例研究 ●ユニット学習内容の検証 ●地域につながり広がる居住地校学習 ・居住地校育成学級転校に向けた取組	●活動パッケージの作成（生活地図＋生活マトリックスシート） ●居住地校交流 ・桂坂地域での役割を担う活動スタート	●地域生活観察表の作成 ・生活地図より生徒の地域での生活を捉える ・短期目標の修正、学習機会の設定 ・場と人を広げ、地域でボランティア活動に取り組んだケース	●校内支援検討会議 ・校内支援についての共通理解・検討シート ●外部専門家活用（PT,ST） ●地域支援の充実 ・わくわくクラブ ・R大学地域活性化ボランティア ・芝生まつり ・もちつき大会
H	研究テーマ他	小学部テーマ	中学部テーマ	高等部テーマ	支援部テーマ

2 1	<p>子どもの、地域の生活を見据えた教育・支援について ～個別の包括支援プランに基づく共同と協働～</p>	<p>目標に迫るための工夫された授業づくり ～ひと・もの・ことへのかわりを広げる～</p>	<p>生徒が地域で、活動パッケージを使いながらより豊かに生活することができるようになるための場作り</p>	<p>一人一人の『できること』を生かす活動の創出 ～やろうとする意欲・できることを卒業後につなげる～</p>	<p>地域支援と校内支援の充実と推進 ～子どもたちへの総合的な支援の実現をめざして～</p>
	<p>＜取組の柱＞ 1) キャリア教育の観点に基づく児童生徒の学習（進路指導）の推進 2) 地域資源の利用の推進</p> <p>●研究推進プロジェクト ・実行プログラムを焦点化 ●地域資源活用プロジェクト ・ジョブコーチシステム ●地域生活支援プロジェクト ●総務部：「私たちの環境宣言21」 ・桂坂統一クリーンデー呼応清掃活動への児童生徒の参加 ・緑のカーテン事業の実施 ・校庭芝生維持活動 他</p>	<p>●カリキュラムベースを用いた短期目標の検証・見直し ●実行プログラムを用いた授業内容の改善</p>	<p>●学部ユニットの見直し ●場の開拓 ・地域で役割を担う場 ・生き方探究・チャレンジ体験 ・評価表の作成 ・水曜日 地域ユニット（桂坂地域） ●居住地校交流</p> <p>・活動パッケージ ・実行プログラムの活用</p>	<p>・具体的活動項目 ・実行プログラムの活用 ・清掃活動の場と人との関係 ・実習の課題と校内の学習場面の活用 ・役割を担う活動でできる自分を取り戻す</p>	<p>●「総合育成支援教育の充実に向けた学校園支援体制の確立」モデル事業の取組 ●外部専門家を活用した自立活動の指導・支援（ST） ●訪問教育における工夫</p>
2 2	<p>子どもの地域での生活を見据えた教育・支援について ～個別の包括支援プランに基づく共同と協働～</p>	<p>児童の「できる」を育て、「できる」を活かす授業づくりと授業改善 ～ひと・もの・ことへのかわりを広げる～</p>	<p>生徒が居住地域でより豊かに生活できるようになるための状況作り</p>	<p>一人一人の生徒が今も将来も「できる」姿で生きていくための授業づくり・授業改善 ～年齢相応のできる手立てや状況づくりを開発・蓄積し、将来の生活につなぐ～</p>	<p>子どもたちの継続的なキャリアアップを支えるために～連携・協働・チームをキーワードにしてコーディネーターとしての役割を考える～</p>
	<p>・外部専門家活用（文部科学省委託研究）</p> <p>●研究推進プロジェクト ●地域資源活用プロジェクト ●キャリアアップ支援システムプロジェクト ・キャリアアップ支援コーディネータの研修 ・できますシートの検討 ・情報バンクの検討 ●総務部：一キャリア教育を支える学校財務一</p>	<p>●カリキュラムベースを用いた短期目標の検証・見直し ●児童の目標に迫る、より多様なユニットを作っていくための、たてわりのユニット編成の見直し ・1・2年、3・4年、5・6年ユニットの編成 ●実行プログラムを用いた授業づくり、授業改善</p>	<p>●「居住地域の日」授業設定 ・7つの居住地域ユニット ・居住地域で家庭の役割を担う ・生き方探究・チャレンジ体験 ・居住地域で余暇活動を広げる ・ユニットと地域資源の連携 ●居住地校交流</p> <p>・活動パッケージ ・実行プログラムの活用</p>	<p>●授業づくり・授業改善 ・「清掃活動」の授業 ・「広報活動」の授業</p> <p>・実行プログラムの活用 ・課題分析表</p>	<p>●校内支援体制 ・コンサルテーション記録用紙（PECS・ABA） ●外部専門家活用（大学・ST・PT・OT）</p> <p>・ここにクラブ 開始（桂川ほうかご交流会）</p>
H	研究テーマ他	小学部テーマ	中学部テーマ	高等部テーマ	支援部テーマ

2 3	<p>子どもの地域での生活を見据えた教育・支援について ～個別の包括支援プランを中核にした 子どもの継続的なキャリアアップを目指して～</p>	<p>児童の「できる」を育て、「できる」を活かす授業づくりと授業改善 ～ひと・もの・ことへのかかわりを広げる～</p>	<p>生徒が地域で「できる姿」を発揮するための状況づくり～活動パッケージをもとにした支援・手だての共有～</p>	<p>卒業後の生活に繋がる、「できる」を総合的な視点で捉えた指導実践～個別の包括支援プランを基にしたキャリアアップの支援と情報共有～</p>	<p>連携の視点から、「できる」を伸ばす授業づくりを考える～外部専門家活用を中心とした、校内支援の充実と広がりを目指して～</p>
	<p>・ 外部専門家活用（文部科学省委託研究）</p> <p>●各学部キャリアアップ支援コーディネータを複数名配置</p> <p>●できますシートの活用</p>	<p>●ケース会議における短期目標の検証・見直し</p> <p>●実行プログラムを用いた授業づくり、授業改善</p> <p>●「できる」を伸ばし、活かす、新たなユニット学習の取組</p> <p>・ 6年生学年内 役割を担うユニット</p> <p>●居住地校における、「できる」を活かす交流学习の推進</p> <p>●児童の「できる」を伸ばすための教員の指導力向上に向けた取組</p> <p>・ できますシートの活用</p> <p>・ 合同の身体学習</p>	<p>・活動パッケージとできますシートのリンク</p> <p>・ できますシートの機能</p> <p>・ できますシートの作成と活用</p> <p>・ 生き方探究・チャレンジ体験</p> <p>・ スチューデントシティ学習</p> <p>・ 職場体験</p> <p>・ 地域ワーク</p> <p>●居住地校交流</p>	<p>●個別の包括支援プランを基にした情報共有</p> <p>●実習後の「できますシート」の作成</p> <p>●担当者ケース会議</p> <p>・ 情報共有シート</p> <p>・ 教室の物理的構造化</p> <p>・ ワークスデーでの構造化</p>	<p>・ 「連携」の視点から考える校内支援</p> <p>・ 校内支援依頼票（年度当初版・通年版）の配布</p> <p>●ニーズの把握から外部専門家活用へ</p> <p>・ 外部専門家活用 基礎シート</p> <p>・ 外部専門家活用記録票（PT、ST）</p> <p>・ できますシートの活用</p>
2 4	<p>子どもの地域での生活を見据えた教育・支援について ～個別の包括支援プランを中核に据えた 子どもの継続的なキャリアアップを目指して～</p>	<p>児童の「できる」を育て、「できる」を活かす授業づくりと授業改善 ～ひと・もの・ことへのかかわりを広げる～</p>	<p>生徒が地域で「できる姿」を発揮するための状況づくり～居住地域で活かすための支援・手だての共有～</p>	<p>卒業後を見据えた、個別の包括支援プランから始まる授業づくりと支援～移行後に繋がる継続的なキャリアアップを目指して～</p>	<p>専門性を活かした、校内支援と地域支援の充実と広がりを目指して</p>
	<p>●情報バンク3カ年計画スタート</p> <p>・ 抽出指導生徒の通知票を基にした情報バンクの作成</p> <p>・ 抽出児童生徒の「できますシート」の作成</p>	<p>●ケース会議における短期目標の検証・見直し</p> <p>●実行プログラムを用いた授業づくり、授業改善</p> <p>●情報バンク抽出児童の課題に迫る取組</p> <p>●「できる」を伸ばし、活かす、ユニット学習の取組</p> <p>・ 5・6年生役割を担うユニット</p> <p>●居住地校における、「できる」を活かす交流学习の推進</p> <p>●児童の「できる」を伸ばすための教員の指導力向上に向けた取組</p> <p>・ できますシートの活用</p>	<p>●「居住地域ユニット」の施行と検証（桂・洛西）</p> <p>・ 学校での取組みを地域に持出し「できる姿」を発揮する</p> <p>●「活動パッケージ」「できますシート」を基にした支援・手だての共有</p> <p>・ ユニット間で支援・手だてを共有し家庭に繋げる</p> <p>●居住地校交流</p> <p>・ 活動パッケージ</p> <p>・ できますシートの活用</p>	<p>●定例ケース会議の実施</p> <p>・ コミュニケーション</p> <p>・ 「時間」「空間」の構造化</p> <p>●「できる」を繋ぐ授業実践</p> <p>・ ワークスデー（園芸）との連携</p> <p>・ ワークスデー（流通サービス）産業現場実習との連携</p> <p>●卒業後に繋がる「できる」を活かした進路選択</p> <p>●できますシートの活用</p> <p>●情報バンクの取組</p>	<p>●校内支援</p> <p>・ 教員間の連携による有効な校内支援の確立</p> <p>・ 支援部と指導部の連携による有効な校内支援の確立</p> <p>●地域支援</p> <p>・ 支援部教員と特別非常勤講師間の連携について</p> <p>・ STが特別非常勤講師に</p>
H	研究テーマ他	小学部テーマ	中学部テーマ	高等部テーマ	支援部テーマ

2 5	子ども一人一人の将来の生活を見据えた教育・支援について ～個別の包括支援プランを中核に据えた 子どもの継続的なキャリアアップを目指して～	児童の「できる」を育て、「できる」を活かす授業づくりと授業改善 ～ひと・もの・ことへのかかわりを拡げる～	生徒が地域で「できる姿」を発揮するための状況づくりと支援 ～地域で活かす、授業の創造～	卒業後を見据えた、一人一人の「できる」を発揮する授業づくりと支援 ～情報の移行を継続的なキャリアアップに繋ぐ～	専門性を活かした、校内支援と地域支援の充実 ～連携を重視して～
	<ul style="list-style-type: none"> ・21世紀型ICT教育の創造モデル事業の取組 子どもの「できる」を引出し、夢や希望を育てる メディアセンターとしての図書館活用 <p>●情報バンク3カ年計画・中間報告会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・短期目標の推移表 ・情報バンクから通知表への出力 	<ul style="list-style-type: none"> ●ケース会議における長期目標・短期目標の検証・見直し ●実行プログラムを用いた授業づくり、授業改善 ・行動目標&略案シート ●情報バンク抽出児童の目標に迫る取組 ・できますシートの活用 ・推移表の活用 ●「できる」を伸ばし、活かす、学習の取組 ・5・6年生役割を担うユニット ・交流学习 ●児童の「できる」を伸ばすための教員の指導力向上に向けた取組 	<ul style="list-style-type: none"> ●ユニット学習の授業改善 ●抽出生徒の情報バンクの作成と推移表の考察 ●抽出生徒の情報バンクの情報共有と活用 ●居住地校交流 <ul style="list-style-type: none"> ・活動パッケージ ・できますシートの活用 ・四条ユニット立ち上げ 	<ul style="list-style-type: none"> ●学部間・学年間・進路先への情報移行のあり方、内容についての検討 ・シート①②の提案 ●「できる」を継続的に育てる指導の展開 ・自己分析シート ・相談シート ・振返りシート ・できたことシート 他 ●「情報バンク」の活用 ・推移表の活用 <ul style="list-style-type: none"> ・できますシートの活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援部業務年間計画 ●校内支援 ・通年支援の依頼件数 ・「身体の学習」毎月の巡回表 ・外部専門家（PT）と支援部教員の連携 ・特別非常勤講師（ST）と指導部教員の連携 ●地域支援 ・「育」支援センターと他機関との連携について ・保護者や学校との連携について ・大学との連携について（子ども遊び隊） ・福祉施設との連携 にこにこクラブ（放課後交流会）
2 6	子ども一人一人の将来の生活を見据えた教育や支援・手だてについて ～個別の包括支援プランを根幹に据えた 子どもの継続的なキャリアアップを目指す～	児童の「できる」を育て、「できる」を活かす授業づくりと授業改善 ～ひと・もの・ことへのかかわりを拡げる～	生徒が地域で「できる姿」を発揮するための状況づくりと支援 ～地域で活かす、授業の創造～	「できる」を自ら発揮する支援・手立ての工夫 ～卒業後に繋ぐ、継続的なキャリアアップ～	
	<ul style="list-style-type: none"> ・平成26年度パナソニック教育財団実践研究助成 <p>●情報バンク3カ年計画・最終報告会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報バンクの取組 キーワード検索、推移表、区分検索、通知票への出力 ・できますシートの取組（「できます会」の実施） ・個別の包括支援プランと情報バンクとできますシートとの関連 	<ul style="list-style-type: none"> ●ケース会議における目標の検証と見直し ●目標達成に向けたユニット編成と授業づくり ・行動目標&略案シート ・できますシート ・できます会 ●役割を担う活動の学習 ●交流及び共同学習 ・学校間交流学习 ・居住地校交流学习 ●指導者の指導力向上を目指した取組 ●中学部への情報移行 	<ul style="list-style-type: none"> ●活動パッケージの作成と活用 ●できますシートを使っての授業づくり（できます会） ●居住地域ユニットの充実と拡大（桂・洛西・四条ー桂・松尾ユニットの立ち上げ） ●交流及び共同学習 ・学校間交流学习 ・居住地校交流学习 ●情報移行（小・中学部） 	<ul style="list-style-type: none"> ●「できる」を自ら発揮する支援・手立ての工夫 ・できますシートの活用 ・できます会での振り返り ●情報移行の内容の充実と「情報バンク」の活用 ・事業所へのアンケート調査 	
H	研究テーマ他	小学部テーマ	中学部テーマ	高等部テーマ	支援部テーマ

27	<p><京都市の地域制総合制支援学校 四校合同研究発表会> 京都市の地域制総合制支援学校の10年間の成果と課題 —京都市の地域制総合制支援学校の10年間の取組の成果と課題 及び今後のインクルーシブ教育システム構築に向けた課題と展望—</p> <p>・文部科学省「特別支援学校機能強化モデル事業（特別支援学校のセンター的機能充実事業）委託事業」</p>	<p>児童の「できる」を育て、「できる」を活かす授業づくりと授業改善 ～ひと・もの・ことへのかかわりをひろげる～</p>	<p>生徒が地域で「できる」を発揮するための状況づくりと支援 ～家庭や地域につながる授業の展開～</p> <p>・居住地域ユニット 四条→右京スペシャルに改称</p>	<p>「できる」を卒業後に繋ぐ、授業づくりと支援 ～継続的なキャリアアップを目指した教育課程～</p>	<p>専門性を活かし、子どもたち一人一人の「できる」につなげる校内支援と地域支援のさらなる充実 ～校内での連携や地域との連携～</p>
28	<p>子ども一人一人の将来の生活を見据えた教育や支援・手立てについて ～個別の包括支援プランを根幹に据えた 子どもの継続的なキャリアアップを目指す～</p> <p>・できますシートの活用（できますシート・できます授業・できます会） ・情報バンクの活用 ●交流及び共同学習推進プロジェクト</p>	<p>児童の「できる」を育て、「できる」を活かす授業づくりと授業改善～ひと・もの・ことへのかかわりをひろげる～</p> <p>●授業づくりと授業改善 ●「できる」を伸ばし「できる」を活かす学習の取組 ・役割を担う学習 ・できますシートの活用 ●交流及び共同学習 ・居住地校交流 担任引率 ●情報バンクの活用</p>	<p>生徒が地域で「できる」姿を発揮するための状況づくりと支援 ～家庭や地域につながる授業の展開～</p> <p>●授業づくりと授業改善 ・活動パッケージ ・できますシートの活用 ●居住地域ユニットの拡大・再編と充実 （洛西、桂・松尾、右京＋久世・桂川エリア立ち上げ） →校区内全域で地域ユニット設定 ●交流及び共同学習 ・居住地校交流 ・学校間交流</p>	<p>卒業後を見据えた、「できる」が発揮できる授業づくりと支援 ～移行後の継続的なキャリアアップを目指して～</p> <p>●できますシートの取組 ●「学校」という場を超える取組 ・産業現場等実習（実習ノート） ●「障害種」を超える取組 ・学部教員アンケート</p>	<p>専門性を活かし、子ども一人ひとりの「できる」につなげる校内支援と地域支援のさらなる充実 ～校内での連携や地域との連携～</p> <p>●校内支援 ・支援依頼票 A・B ・校内支援担当窓口の設置 ●地域支援 ・継続性を念頭に置いた巡回相談 ・学校種を超えた支援（幼稚園、小学校、児童館） ・タブレット端末を活用した ST の地域支援 ・公開学習会</p>
29	<p>子ども一人一人の将来の生活を見据えた教育や支援・手立てについて ～個別の包括支援プランを根幹に据えた 子どもの継続的なキャリアアップを目指す～</p> <p>・養護学校再編以降の本校の研究経過 ・できますシートの活用（できますシート・できます授業・できます会） ・根拠に基づいた指導実践 ・交流及び共同学習 ・情報バンクの活用</p>	<p>児童の「できる」を育て、「できる」を活かす授業づくりと授業改善～ひと・もの・ことへのかかわりをひろげる～</p> <p>●授業づくりと授業改善 ●「できる」を伸ばし「できる」を活かす学習の取組 ・できます授業 ・役割を担う学習 ●交流及び共同学習 ・居住地校交流 担任引率</p>	<p>生徒が地域で「できる」を発揮するための状況づくりと支援 ～家庭や地域につながる授業の展開～</p> <p>●生徒が自ら考え、自ら活動する授業 ・活動パッケージ ・できますシートの活用 ・課題分析アセスメント表 ●地域ユニットの充実 ●交流及び共同学習 ・居住地校交流 ・学校間交流</p>	<p>卒業後を見据えた、「できる」が発揮できる授業づくりと支援 ～移行後の継続的なキャリアアップを目指して～</p> <p>●できますシートの取組 ●「学校」という場を超える取組 ・産業現場等実習 ・学部教員アンケート ●「学校種」を超える取組 ・居住地域中学校との交流</p>	<p>専門性を活かし、子ども一人ひとりの「できる」につなげる校内支援と地域支援のさらなる充実 ～校内での連携や地域との連携～</p> <p>●校内支援 ・通信機器を使用した支援 ・2種の支援依頼票の1本化 ・OT, PT, ST ●地域支援 ・継続性を念頭に置いた巡回相談 ・専門性を活用した地域支援（ST公開学習会、通信による支援、弱視通級指導教室）</p>
30	<京都市の地域制総合制支援学校 第2回 四校合同研究発表会>				

【資料Ⅰ－１】平成16年度以降の本校研究テーマと内容一覧

2 研究テーマ

「子ども一人一人の将来の生活を見据えた教育や支援・手立てについて」

～個別の包括支援プランを根幹に据えた

子どもの継続的なキャリアアップを目指す～

(1) テーマ設定の理由

本校では、養護学校再編以来、「障害種」「学校」「学校種」の3つの場を超えることを目指した取組を推進してきた。また、平成21年度からの一連の研究の取組の中で、学校や地域において、たくさんの“ひと”，さまざまな“もの”，いろいろな“こと”に自らが積極的にかかわり，より自分らしく，より生き生きと過ごせる子どもを育て，障害のある子どもの継続的なキャリアアップを図りたいと考えて教育実践にあたってきた。

今年度は「障害種」「学校」「学校種」の3つの場を超える取組を振り返り，これまでの研究において得られた知見を活かし，子どもたちの継続的なキャリアアップを目指し，研究を進めていく。ここでは，「できます授業」の取組（「4 研究内容・方法」の項参照）と交流及び共同学習に焦点を当てて報告する。

「できます授業」については，子どもの「できる」を育む，個に応じた状況作りや支援・手だての充実を図るために，これを研究の取組の中心に位置づけ，授業全体の質の向上を図っていく。その際，「根拠に基づいた教育実践」を行っていくために，エピソードを大切にしつつ，各部エビデンスを示しながら実践を進めていく。

交流及び共同学習については，これまでも継続して実践を重ねているが，特に昨年度「交流及び共同学習推進プロジェクト」を立ち上げ重点的に取り組んだという経緯がある。今年度は，昨年度の各学部における交流及び共同教育の取組を引継ぎ，更に深めていきたい。

最後に，これまでの研究経過を踏まえ，情報移行をスムーズに行い，切れ目のない継続的な指導・支援が行えるようにするために，情報バンクについても取組を継続し，その活用の可能性について模索していく。

学校教育目

教育理念

指導の重

「できる」自分を知り、夢や希望を持って、自らひと・もの・ことに向かう子どもを育てる

- 個別の包括支援プランによる子どもの「生きる力」と保護者への支援
- 児童生徒を地域に生きる一人の生活者として捉える

- 健康で丈夫な体をつくる
- 身近なひと・もの・ことに、自らかかわる
- 新しいことに挑戦しながら、好きなこと、楽しいことを、自ら見つけ、自ら選び、自ら活動する
- ひととのかかわりを深める中で、「できる」自分を知り、役割を果たそうとする

各部重点目

【小学部】

- ◆様々な発達、障害、特性を踏まえ、個別の包括支援プランをもとに、一人一人に応じたカリキュラムをつくり、成功体験を重ねながら「生きる力」の基礎基本を培う指導を展開する
- ◆一人一人に応じた、できる状況づくりや支援を工夫し、「できる」を育て、「できる」を活かす授業づくりを行う
- ◆家庭・地域・学校における「できる」について、保護者や諸機関（居住地校を中心として）と連携する中で情報共有を強化し、継続的、継続的な支援を行う

【中学部】

- ◆「活動パッケージ」を使ってできる状況づくりや支援を工夫し、「できる」を育て「できる」を活かす授業づくりをすすめる
- ◆指導者間の連携を深め、一人一人の生徒が地域でより豊かに生活していくための手立てを共有する
- ◆居住地域の様子や活用できる地域資源を調べ、授業に活かす
- ◆家庭・地域・学校における「できる」について、保護者や諸機関（居住地校を中心として）と連携する中で情報共有を強化し、継続的、継続的な支援を行い、広げる

【高等部】

- ◆一人一人の「できる」を卒業後の生活に活かす授業を展開する
- ◆社会の一員として役割を担う将来の姿を生徒・保護者とともに具体的・現実的にイメージし、実習や地域資源の活用を通して生徒をとりまく社会に働きかける
- ◆生徒が地域で豊かに生活するためにネットワークを構築し、家庭・地域・学校における「できる」について、保護者や諸機関と連携する中で情報を共有する

【支援部】《校内支援の充実》

- 指導部、総務部との連携のもとに充実した校内支援を行い、子どもたちが楽しく学べる学校を目指す
- 特別非常勤講師や外部専門家を効果的に活用できるよう各学部と連携し、子どもたち一人一人の継続的キャリアアップを支援する
- 校内支援を通して、教職員の専門性向上を図り、個別の包括支援プランをもとにした実践へ活かす
- 《地域支援の充実》
- 障害のある子ども、保護者、教職員の継続的キャリアアップを支援する取組を「育」支援センターが推進する
- 障害のある子どもが地域の中で安心して生活できるように、地域、学校、福祉等の関係機関と連携し、専門職の活用も視野に入れた新たな「地域」の創造をめざす

【総務部】

- 教職員一人一人が、学校教育目標を実現する主体者として、自らの果たすべき役割を明確にし、責任を持って、お互いに連携・協働できるように円滑な学校運営を推進する
- 保護者や地域の願いを把握し、地域ぐるみの学校づくりを推進する
- ◆学校評価に基づき、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）、保護者、地域や関係機関と連携した共同事業の実施と研究実践
- ◆教育活動への支援と多様なニーズに応じる地域の教育力の向上

保護者重点目

- 学校・地域との連携を密にする
- 子どもたちの自立をめざし、子どもたちの「できる」「やってみよう」を大切に教育（キャリア教育）の考えをもとに、個別の包括支援プランの策定に参画し実施に努める
- 地域活動を中心とした余暇活動の充実を図るとともに「双方向の援助」の実施に努める
- 子どもたちが安全で暮らしやすい地域環境づくりと、保護者同士の子育て支援の実現をめざし協力し合う

研究テーマ

「子ども一人ひとりの将来の生活を見据えた教育や支援・手立てについて」

～個別の包括支援プランを根幹に据えた子どもの継続的なキャリアアップを目指す～

各部研究テーマ

小学部テーマ

- 児童の「できる」を育て、「できる」を活かす授業づくりと授業改善
- ～ひと・もの・ことへのかかわりをひろげる～

中学部テーマ

- 生徒が地域で「できる」を発揮するための状況づくりと支援
- ～家庭や地域につながる授業の展開～

高等部テーマ

- 卒業後を見据えた、「できる」が発揮できる授業づくりと支援
- ～移行後の継続的キャリアアップを目指して～

支援部テーマ

- 専門性を活かし、子ども一人ひとりの「できる」につなげる校内支援と地域支援のさらなる充実
- ～校内での連携や地域との連携～

情報バンク： 質の高い情報を伝え繋ぐ

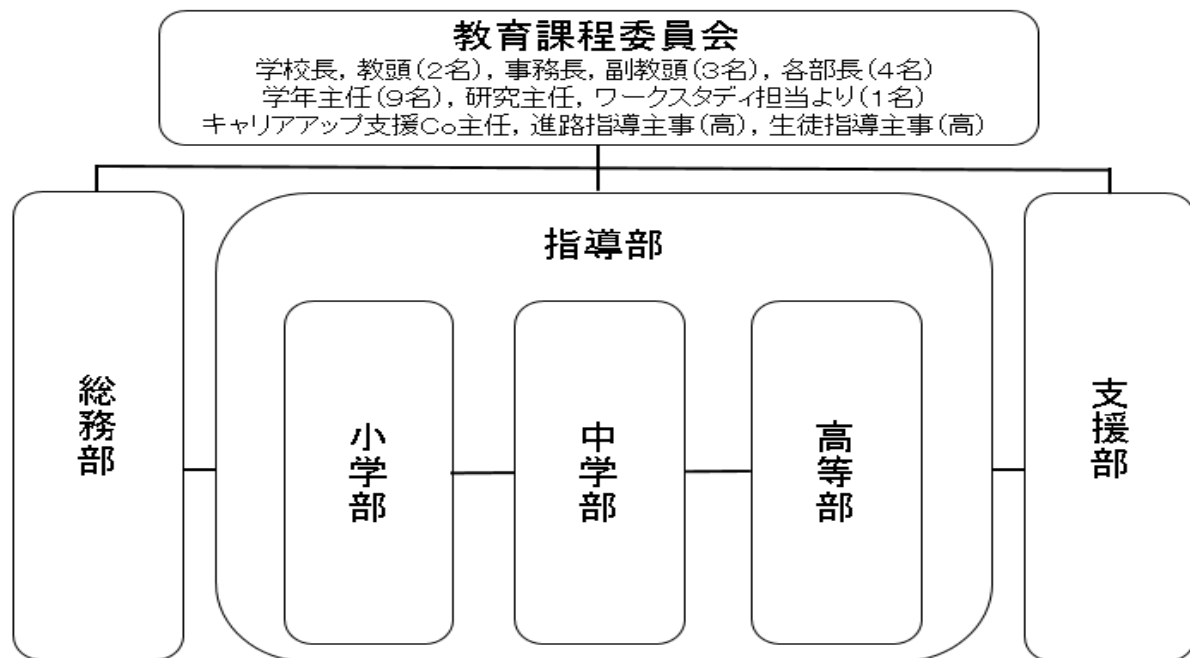
	小学部	中学部	高等部
障害種を超える 取組	「できます授業」の取組	居住地域ユニット	「できます授業」を 各学年1つずつ設定
学校という場を 超える取組	役割を担うユニット		産業現場等実習におけ る課題を学部で共有
学校種を超える 取組	学校間交流 居住地校交流	学校間交流 居住地校交流	生徒の居住地域の中学校 育成学級との学校間交流
平成28年度 「交流及び共同学習推進プロジェクト」			

【資料Ⅰ－３】平成29年度 各学部における「三つの場」を超える主たる取組

3 研究組織

(1) 今年度の研究組織について

本校においては、学校の教育課題に対し検討する会として教育課程委員会が設けられている。今年度の研究は、教育課程委員会を研究の中心として据え、研究を推進していくとともに、各部の研究についての情報交換や話し合いを行い、共通理解を図った。メンバーには各部部長・学年主任が入っており、教育課程委員会で確認したことを各部において周知しながら、研究実践を進めていった。



【図Ⅰ－４】研究組織図

(2) 教育課程委員会日程と内容

本年度は計6回教育課程委員会を開催した。内容については以下の通りである。

	日 程	内 容
1	7 月 6 日 (木)	・ H 2 8 年度 of 取組のふりかえり ・ 今年度の研究について
2	1 0 月 3 1 日 (火)	・ 各部研究進捗状況 (できます授業確認) ・ データ収集について
3	1 1 月 2 2 日 (水)	・ 研究進捗状況確認 ・ 実践報告集 読み合わせ日程確認
4	1 2 月 2 0 日 (水)	・ H 2 9 年度研究報告集執筆開始
	1 月 中	・ H 2 9 年度研究報告集読合せ
5	2 月 2 0 日 (火)	・ H 2 9 年度 of 取組のふりかえり
6	3 月 2 0 日 (火)	・ H 2 9 年度実践報告集完成 ・ H 3 0 年度にむけて

【資料1－5】平成29年度 教育課程委員会日程と内容

4 研究内容・方法

(1) 「できますシート」の活用

ア 目的

本校では平成23年度より、一人の児童生徒の変容を継続的にシートに記載し、その情報を繋いでいくことで、さらに「できる」ことの可能性を上げ質の高い支援情報を蓄積していくことを目指し、「できますシート」※1を活用した研究の取組を学校全体で実施してきた。定期的に「できますシート」を活用した「できます授業」※2、「できます会」※3を行うことで、学年や指導チームで情報共有をする。

7年間の研究経過の中で、これらの取組はすでに本校の研究文化として定着している。

イ 方法

「できますシート」を活用した研究については、各学部が日程調整し柔軟に設定・実施しやすいように、学部主導で行っていくこととする。進め方は次のとおりである。

- ・ 対象児童生徒・対象授業を決定する (各部3人×2回を基本とする)
- ・ 各学部において「できます授業」及び「できます会」の日程調整を行ない、関係者に知らせる。年間を通して計画的に実施する。

- ・授業者は「できますシート」を活用し、対象児童生徒の支援や手だてを考えることを柱にして、授業づくりを行う。
- ・「できますシート」をもとに「できます授業」を行う。学部長・学年主任・支援部教員・管理職・研究主任等が参観して、気づきを「できますシート」に記入する。
- ・「できます授業」当日（若しくは後日）の放課後に「できます会」を持ち、授業者と参観者で「できますシート」について検討を行なう（30～40分程度）。この中で各参観者の気づきを共有する。
- ・検討した指導内容・支援や手だてのアイデア等を「できますシート」にまとめ、センターサーバーに保存しておく。
- ・「できます会」で議論・検討した手だてや支援等、子どもたちが自らわかって動ける「できる」の情報を、包括支援プラン作成や指導案作成・授業展開に役立てていく。
- ・「できますシート」を“子どもの記録”的な一つのツールとして、授業でできたことを他の場面で活用したり、様々な場面での「できる」と「できる」をつなげたり、「できる」を高次化していくために次のステップを考える資料としたりして、児童生徒の確実なキャリアアップに繋げていく。

<用語説明>

※1 「できますシート」

児童生徒の今の「できる」から次の「できる」を導きだし、継続的キャリアアップに繋げるためのツール。

※2 「できます授業」

「できますシート」を活用した授業実践。各授業、対象児童・生徒を一人抽出し授業を行う。授業参観者は、子どもの「できる」姿をできるだけ多く見つけ、記述することによって、次の授業へのアイデアや活動の拡がりができ、情報共有ができる。支援つきでできる姿や環境設定などの質の高い情報を蓄積して個々の児童生徒のキャリアアップに繋げる。

※3 「できます会」

「できます授業」が行われた日の放課後（若しくは後日）に、授業者、参観者が集まり、「できますシート」をもとに、本時の授業で対象児童生徒の「できたこと」「手だての確認」「新しい『できる』を拡げるためのアイデア」「できる状況づくりと支援の改善」等を話し合う事後研究会。

できますシート①

日版

だれが ○○ ○○
 目標：本時の授業で達成を目指す具体的なねついで記入する（本時の行動目標）

いつ ○月○日（ ） ○○時○○分 ～ ○○時○○分 ； ところで ○棟○階 ○○教室

だれと

できる状況づくり	支援
<p>学習の事前準備や状況づくりなど物理的な環境を整えること</p>	<p>指導者や支援者による直接的な かかわりや支援のこと</p>



こんなことができた（手だて付きで記入）

手だて（状況づくりや支援）付きで、子どもたちが「できた」具体的な内容



「できる」を拡げるためのアイデア

こんなシチュエーションなら…，こんな手だてなら…，こんな時だったら…，こんな教材なら…，など

この学習で見つけた「できる」「できた」を活かしたり，広げたりするためのアイデア

【資料Ⅰ—6】 できますシート

ウ できます授業日程

学部	授業	学年	対象	できます授業	できます会
小	1・2年生ユニット レッツ！スマイル	小 1	A	10 月 18 日 (水)	10 月 19 日 (木)
				11 月 22 日 (水)	11 月 22 日 (水)
				12 月 20 日 (水)	12 月 21 日 (木)
				2 月 14 日 (水)	2 月 14 日 (水)
	4・5・6年生ユニット 選んで伝えよう	小 6	B	10 月 17 日 (火)	10 月 18 日 (水)
				12 月 12 日 (火)	12 月 12 日 (火)
				1 月 23 日 (火)	1 月 23 日 (火)
	配達ユニット 学校だよりを届けよう	小 6	C	10 月 19 日 (木)	10 月 24 日 (火)
				11 月 2 日 (木)	11 月 2 日 (木)
				12 月 7 日 (木)	12 月 7 日 (木)
				12 月 21 日 (木)	12 月 21 日 (木)
				1 月 18 日 (木)	1 月 18 日 (木)
2 月 1 日 (木)				2 月 1 日 (木)	
中	スキルユニット 買物	中 1	D	10 月 12 日 (木)	10 月 12 日 (木)
				12 月 7 日 (木)	12 月 7 日 (木)
	スキルユニット コミュニケーション	中 2	E	10 月 19 日 (木)	10 月 19 日 (木)
				12 月 21 日 (木)	12 月 21 日 (木)
	スキルユニット チャレンジ	中 3	F	10 月 6 日 (金)	10 月 6 日 (金)
				1 月 11 日 (木)	1 月 11 日 (木)
高	ライフスタディ	高 1	G	7 月 3 日 (月)	7 月 3 日 (月)
				9 月 25 日 (月)	9 月 25 日 (月)
				10 月 2 日 (月)	10 月 2 日 (月)
	ライフスタディ	高 2	H	9 月 25 日 (月)	9 月 25 日 (月)
				12 月 18 日 (月)	12 月 18 日 (月)
	ライフスタディ	高 3	I	6 月 13 日 (水)	6 月 14 日 (火)
				9 月 19 日 (火)	9 月 20 日 (水)
	クラススタディ		J	10 月 17 日 (火)	10 月 17 日 (火)
				1 月 15 日 (月)	1 月 15 日 (月)

【資料Ⅰ－７】平成２９年度 各部できます授業・できます会日程一覧表

エ 研究協力

研究協力ということで、今年度は「できます授業」を各学部1本抽出し、大学講師の授業観察・助言を得た。研究協力日程は下記【資料Ⅰ－8】のとおりである。

応用行動分析の視点からの助言により、客観的事実（子どもの行動）に基づいて状況づくりと支援を工夫していくことの大切さを再考させられた。またこのことは、研究のテーマ設定理由にも示した「根拠に基づいた教育実践」につながり、かかわる指導者に新たな視座をもたらした。

学部	授業・担当者	対象	授業・助言等日時	研究協力内容
小	456年ユニット 選んで伝えよう	小6 B	1月23日（火）	講師来校
			10：35～11：20	授業観察
			2月13日（月）	講師来校
			17：00～	1月23日の授業観察を受けて助言
中	スキルユニット 買い物	中1 D	12月7日（木） 10：00～12：20	講師来校 授業観察後助言
高	ライフスタディ	高2 H	12月11日	10月30日授業記録より助言
			16：10～17：00	学部と情報共有
			2月13日（月）	講師来校
			16：10～17：00	12月18日授業記録より助言

【資料Ⅰ－8】研究協力来校等日程

（2） 交流及び共同学習

各学部において、昨年度の取組をもとに、実践を継続し積み重ねていく。計画・日程調整・実施は学部主導で行なっていくこととする。各学部の取り組み内容については、各学部研究報告において述べる。

（3） 情報バンクの活用

ア 目的

情報バンクとは、「各児童生徒の個別の包括支援プランに基づく指導結果（通知票）」の情報（目標・内容・手だて・様子・評価）をセンターサーバー上に蓄積・活用していくためのシステムであり、個々の児童生徒の年度を超えた継続性や連続性のある指導を行うことを目的としている。

イ 研究経過

平成24年度に本校研究の取組として、情報バンク開発3か年計画がスタートした。「現状の包括支援プラン記載事項は指導後の結果のみの記述に留まっており、子どもの『できる』ことを卒業時点の姿だけで伝えてしまう。そこに至るまでにいかなる手だてがとられたのか、どのような様子・経過を経てその結果に至ったのか不明確なため、卒業後に包括支援プランが十分活用なされていない。在学児童生徒の『できる』の引継も不十分な様子が見られる。これら移行時に必要な事項について端的に記載されているのは通知票であり、ここから『通知票記載事項をデータベース化して蓄積していけば、個の成長を俯瞰することおよび節目でとられた手だてを知ることが容易になるのではないか?』という研究仮説が出てきた」(平成24年度研究紀要より)ことが、情報バンク開発のきっかけであった。

ウ 情報バンクの有用性

過年度の取組の中で、情報バンクの有用性としては以下の3点があげられている。1点目は児童生徒の過年度の目標の推移が一目で分かること、2点目は検索キーで手だてや様子を容易に引き出せるので新しい目標を考える時の辞書的なものとして使用できること、3点目は記載内容を一覧化することで移行資料となりうることで、その最大の特長として挙げられる。

エ 情報バンクの課題

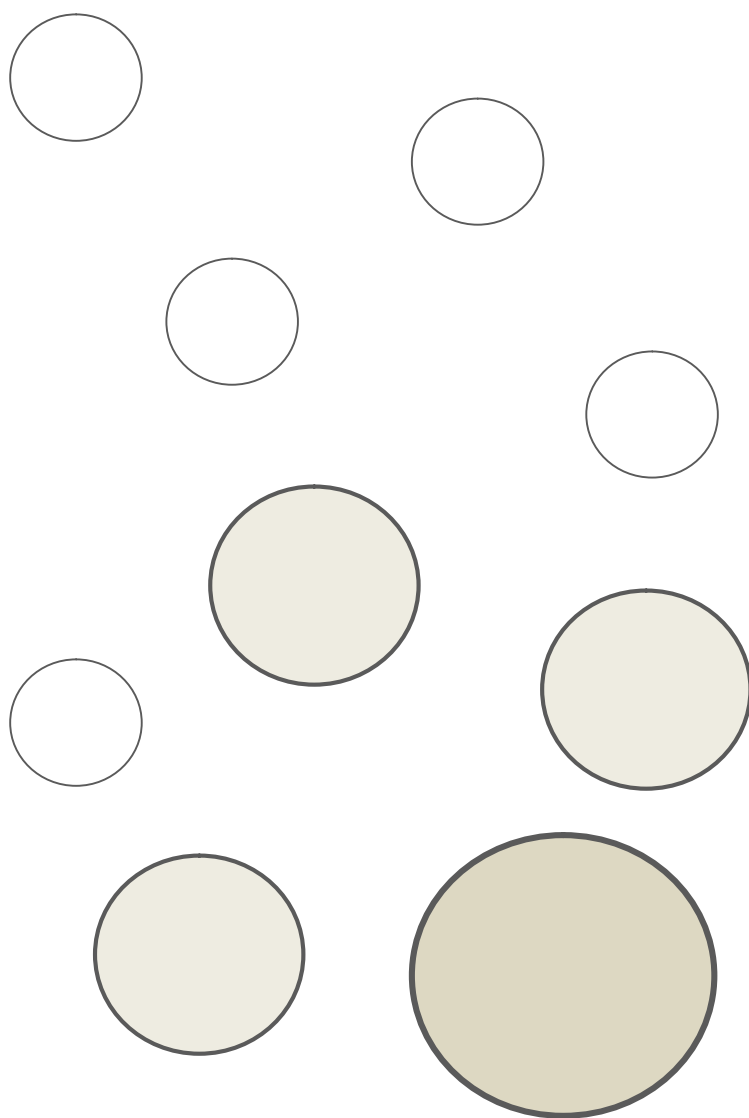
反面、情報バンクの取組課題として大きく3点が考えられる。1点目はシステム上の不具合であり、これまでに入力データが消えるなどのトラブルが報告されている。2点目はセキュリティー上の問題である。情報バンクはもともと児童生徒の個人情報なので、京都市のセンターサーバー上に保存されている。このため、日々セキュリティーが最新のものに更新されていく。新しいセキュリティーがかかると、たびたびセキュリティーを解除する作業が必要になってくることである。3点目は入力作業に労力がかかることである。システム上の不具合やセキュリティー上の問題により、現状では、一旦入力された通知票の情報を情報バンクに移し替える作業を行なっている。このため、入力に多大な時間と労力を要する。

オ 今年度の情報バンクの活用について

本年度の情報バンクの取組については、使いたいタイミングで情報バンクを作動させることが難しいなど、先述の課題が上手くクリアしきれず、システムの活用及び研究が進まなかった。

先にもあげたように、情報バンクの有用性・利便性については、過年度研究において十分に示されている。情報バンクの活用を阻む要因はシステム上の不具合及びセキュリティ上の問題、そして入力の手力である。システム上の不具合については、情報担当者が日々改善し、その解消にあたっており、現在ではそのほとんどが改善されつつある。セキュリティ上の問題については、都度担当者と密に連絡を取って対応していく他ない。よって、次年度以降は入力方法に焦点を当てアプローチしていきたいと考える。そうすることで、情報バンクの活用が活性化するのではないかと考える。情報バンクに直接入出力するためには現行のワードファイルによる通知票から、エクセルファイルへと変更することが有効であると考えられるので、次年度以降、通知票のエクセルファイル化を探っていくことで情報バンクの実用化を図り、子どもの「できる」やその過程を伝え繋ぎ、一人一人の子どもの継続的なキャリアアップを目指していきたい。

Ⅱ 小学部の取組



Ⅱ 小学部の取組

1 研究テーマ

**「児童の『できる』を育て、『できる』を活かす授業づくりと授業改善
～ひと・もの・ことへのかかわりをひろげる～」**

(1) テーマ設定の理由

小学部においては今年度、上記の研究テーマを掲げて、研究に取り組んできた。今年度の本校の学校教育目標は「『できる』自分を知り、夢や希望を持って、自らひと・もの・ことに向かう子どもを育てる」である。この目標に対して小学部段階においてはまず、学校生活における児童一人一人の「できた」や「(もっと) やってみたい」という気持ちを大切にし、それを育むことで、より「できる」自分を知ってほしいと考えている。その「できる」自分を知るために、適切な支援・手だてを講じることで、ひと・もの・ことへのかかわりをひろげていきたい。

小学部は、子どもたちが「学校」という新たな世界と出会い、身近なひと・もの・ことにかかわり、様々なことに挑戦し成長する時期である。また、集団の中で、好きなこと・楽しいことを見つけ、自ら選び・活動を行なうことで、「できる」自分を発見する時期でもある。

今年度も個別の包括支援プランを基に一人一人の目標・課題に応じた授業実践を重ね、その中でできる状況づくりや支援を工夫し、子どもの「できる」を育て、積み重ね、活動の場を自分から学級・学年・学部・学校・地域（居住地）へとひろげていくことを目指して研究を進めていく。

(2) 今年度の研究について

ア 授業づくりと授業改善

～「障害種」を超える取組～

小学部においては平成16年度の養護学校（現総合支援学校）再編以来、児童一人一人の目標に応じた授業づくりを行なっている。その中で、学年はもちろんのこと、縦割りのユニット学習においても、障害種を超えた授業を展開している。抽出した授業において「できますシート」を活用し、事前と事後の研究協議を行うことで毎回の授業が深まるようにしている。具体的に

は、児童のユニット目標（短期目標）を達成するべく、どのような取組が最善なのかを考え、ひとつひとつの授業の中で短期目標と取組がどのようにリンクしているかを検討することで、児童一人一人の目標に迫る授業づくりならび実践、授業改善を図っている。

イ 「できる」を伸ばし「できる」を活かす学習の取組 ～「学校」という場を超える取組～

子どもたちは、将来的には学校から巣立っていき、社会の中で生活していく。そのことを踏まえながら、小学部段階においても学校という場を超え校外と繋がる取組が必要であると考えている。そこで、4～6年生において、学級や学年で係活動に取り組んできた児童の実態やねらいから、校内・校外・地域において特に役割活動に取り組むユニットを編成した。その中で、ひと・もの・ことへのかかわりを学部や学校・地域にひろげていきたいと考える。

この取組においても、一人一人の子どもたちが「できる」自分を知り、「できる」を活かしてほしいと考えている。そのためにも、先述した「できますシート」を活用することで、一人一人に応じた支援・手だてを考え、講じることで与えられた役割を果たしてほしいと考えている。

ウ 交流及び共同学習（居住地校交流学习） ～「学校種」を超える取組～

学校間における交流及び共同学習においては、学校種を超え、同じ場で共に学ぶことを追求していきたい。両校の児童の目指すべき姿を相手校と話し合い、その姿を引き出せるように、多様で柔軟な事前の取組や実際の活動、事後の学習の進め方など、双方で出し合いながら取り組んでいく。

また、居住地校における交流及び共同学習では、子どもたちの「できる」がより発揮されるようにするためには、どのような状況づくりや支援が効果的であるかを探るため、小学部2年生の児童に焦点をあて取組をすすめてきた。

平成 29 年度 京都市立西総合支援学校小学部研究構造図

学校教育目標 「できる」自分を知り，夢や希望を持って，自らひと・もの・ことに向かう子どもを育てる

めざす子どもの姿

- 自らあいさつする
- 健康な体づくりに努める人
- 環境を大切にする人
- 自分も友達も大切にすること
- 仲間と協力する人
- 責任を持って最後までやり抜く人
- 自分で選び，自分で決める人

研究テーマ

「子ども一人ひとりの将来の生活を見据えた教育や支援・手立てについて」

～個別の包括支援プランを根幹に据えた子どもの継続的なキャリアアップを目指す～

小学部重点目標

のびのび遊び，自信を持って，自ら活動する

小学部のめざす子どもの姿

- 健康で丈夫な体をつくる
- 身近なひと・もの・ことに，自らかかわる
- 新しいことに挑戦しながら，好きなこと，楽しいことを，自ら見つけ，自ら選び，自ら行動する
- ひととのかかわりを深める中で，「できる」自分を知り，役割を果たそうとする

小学部指導の重点

◆ 様々な発達，障害，特性を踏まえ，個別の包括支援プランをもとに，一人一人に応じたカリキュラムをつくり，成功体験を重ねながら「生きる力」の基礎基本を培う指導を展開する

◆ 一人一人に応じた，できる状況づくりや支援を工夫し，「できる」を育て，「できる」を活かす授業づくりを行う

◆ 家庭・地域・学校における「できる」について，保護者や諸機関（居住地校を中心として）と連携する中で情報共有を強化し，継続的，継続的な支援を行う

情報バンクを運用し伝え繋ぐ

小学部研究テーマ

児童の「できる」を育て，「できる」を活かす授業づくりと授業改善
～ひと・もの・ことへのかかわりをひろげる～

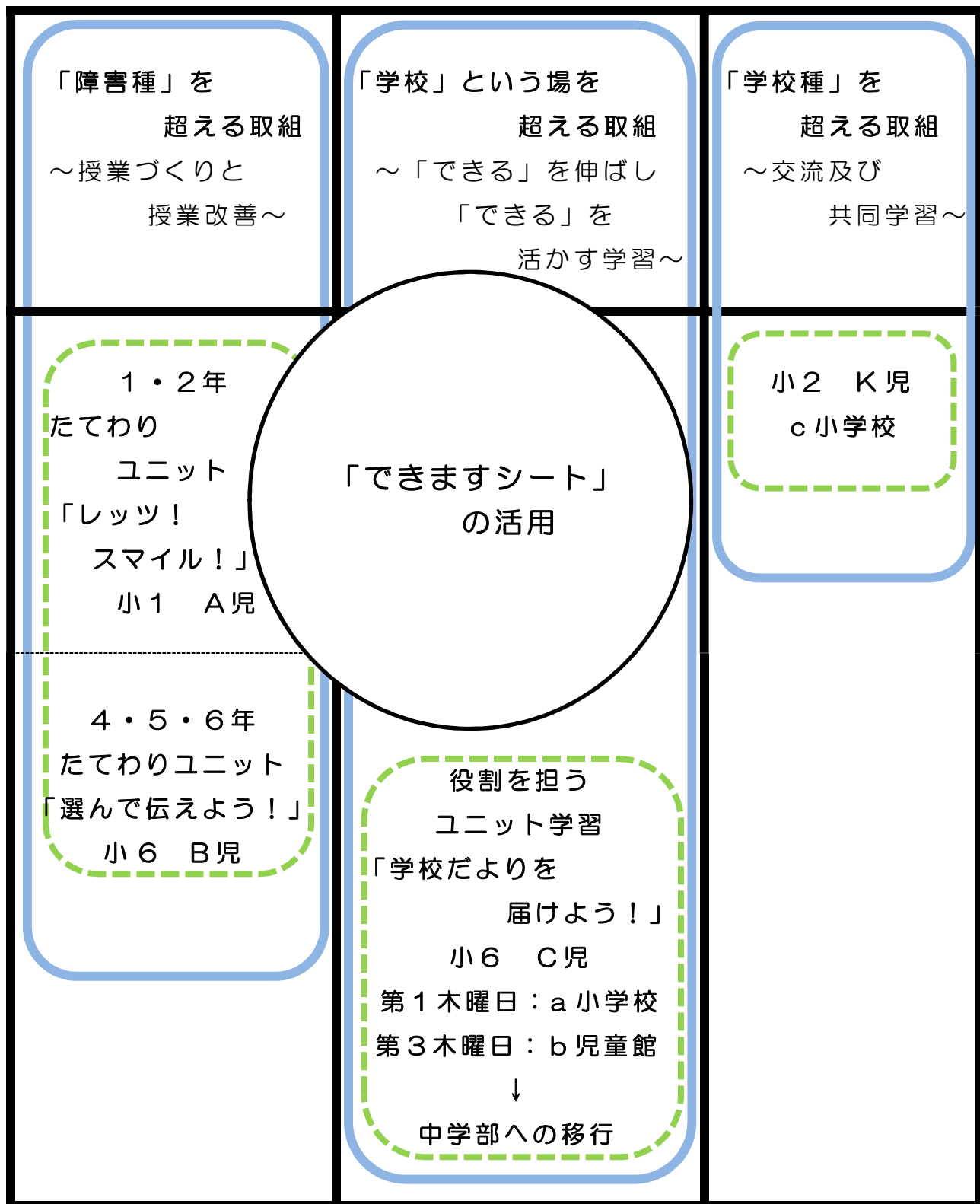
① 授業づくりと授業改善
・ 抽出ユニットにおいて，「できますシート」ならび学習指導案をもとに授業づくりや授業改善に取り組む

② 「できる」を伸ばし，「できる」を活かす学習
・ 「できますシート」を活用し，ひととのかかわりを広げ，ひととやりとりする力を伸ばし，校内外で自分の「できる」を発揮し役割を果たすことをねらいとしたユニットの授業改善に取り組む。

③ 交流及び共同学習
・ 地域や同年代の児童の集団の中で児童が「できる」を発揮できるよう教員引率を推進し，「できますシート」を活用して抽出児童の居住地交流に取り組む
・ 居住地域での生活に向けた土台づくりとして学校間交流を行う。

④ 情報バンクについて ・ 学部・学年移行時やケース会議，居住地校交流などで積極的に活用するための情報蓄積の在り方について探っていく

【資料Ⅱ－１】小学部研究構造図



【資料Ⅱ—2】平成29年度小学部研究の取組

2 研究報告

(1) 今年度の研究について

小学部研究については、以下に焦点を当てて報告する。

- ・授業づくりと授業改善

～「障害種」を超える取組～

- ・「できる」を伸ばし「できる」を活かす学習の取組

～「学校」という場を超える取組～

- ・交流及び共同学習（学校間交流学习・居住地校交流学习）

～「学校種」を超える取組～

ア 授業づくりと授業改善 ～「障害種」を超える取組～

小学部では、障害種を超える取組として知的障害や肢体不自由などの複数の障害種の児童と一緒に活動する学習に取り組んでいる。その中でいくつかのユニットを抽出し、授業づくりや構成、展開を中心に話し合いが行なわれた。また、子どもたち同士のかかわり方、グループやペアを組む相手、活動や移動の順番、教室内での各児童と指導者の配置などのできる状況づくりや支援を、徹底的に練り込むようにした。毎回の研究協議の中から挙がってきた、ねらいの達成状況を確認することで、さらなる授業づくりに繋がり、子どもたちの成長していく姿を見ることができている。ここでは、抽出したユニットの学習の中のひとつについて述べることにする。

- ・授業名：1・2年ライフスタディ「レッツ！スマイル！」

- ・期間：平成29年8月30日～平成30年2月21日

- ・回数：年間16回

- ・内容：活動を通して、友達を意識し、やりとりやコミュニケーションスキルの向上を図る。

- ・対象児童：対象児童Aは、一人遊びを好み、自分の世界に入って楽しんでいることが多い。例えば、想像の中でテレビのキャラクターと遊び、それを延々と一人で楽しんでいる。また、好きな玩具や遊具を友達と共有するということはほとんどない。そこで、本授業においては友達同士が意図的

必然的にかかわる場面を設定していきたい。具体的には、友達同士が協力することで物を運ぶことができる活動や、友達同士が一緒に乗ることで動く乗り物など、友達を意識するような取組を随所に取り入れるようにした。友達とのかかわりは楽しいと感じ、また一緒に遊びたいと思えることが友達を意識する一歩へと繋がると考える。

- ・長期目標：

指導者や友達とかかわって活動する。

- ・短期目標：

物を運ぶ時に、友達とペースを合わせて運ぶ。

順番を守って友達と活動する。

- ・本ユニットにおける行動目標：

蕪に見立てた白い袋（以下「蕪」とする）を運ぶ時に、友達とペースを合わせて運ぶ。

本ユニットは、知的障害・肢体不自由・聴覚障害といった複数の障害種の児童がともに活動を行なっている。その中で、ひと・もの・ことへのかかわりを通して、「できる」自分を知り、やりとりやコミュニケーションの力を伸ばすことをねらいとしている。

児童の「できる」を伸ばすためには、児童の正確な実態把握から導き出された適切な目標設定と、達成する過程における効果的なスモールステップの設定が必要となる。そして、着実にステップを達成するためには、適切な支援と手だて（状況設定）が必要となる。

そのため、「①目標設定→②活動内容検討・支援と手立ての計画→③実践→④評価・事後検討（できます会）→①へ戻る」という流れが大切である。

「できますシート」の活用により、上記の流れをより明確に表すことで、『できます会』における効果的な検討につながり、児童の『できる』を伸ばすことができる」という研究仮説に基づいて、今年度の取組を述べていきたい。

授業観察シート									
対象授業：10月18日（水） 1・2年ライフスタディ「レッツ！スマイル！」									
対象児童：A児（学年：小1）									
スケジュール・備考	分	T 1	T 2	T 3	A	L	M	N	O
授業開始	0								
おおきなかぶパネルシアター	1								
	2								
	3								
	4								
パネルを貼る	5	●			○				
蕪の葉を渡される	6	●			○				
	7								
	8	●			○				
	9	●			○				
	10	●	●		○				
	11	●	○		○				
	12	●			○				
	13		○		○				
	14		●		○				
蕪を運ぶ	15	●			○				
教室移動	16		●		○				
	17	●	●		○				
	18			●	○				
	19	●			○				
ボールプール	20	●		●	○				
	21			●	○				
ボールスライダー	22		●	●	○				
	23		●		○				
	24			●	○				
	25	●			○				
	26	●			○				
	27	●			○				
	28			●	○				
	29	●	●		○				
	30		○		○				
	31	●			○				
	32								
ボールプール片付け	33								
	34	●			○				
	35	●			○				
	36		○		○				
	37	○			○				
	38	●			○				
	39	○			○				
	40	●			○				
	41	○			○				
	42	●			○				
	43	●			○				
	44								
挨拶	45								

2回

0回

1回

4回

指導者とのかかわりの回数

T 1：40回程度

T 2：9回，T 3：8回

A児から指導者への
かかわり
合計7回

【資料Ⅱ－3】A児の授業観察シート①

【資料Ⅱ－３】は、１０月１８日の授業におけるＡ児のかかわりを表にしたものである。Ｔは各指導者、Ａ・Ｌ～Ｏは各児童である。この資料を見ると、この授業を通してのＡ児からの他者へのかかわりは合計７回で、その全てが指導者（Ｔ１）へのかかわりであり、友達へのかかわりは０回である。この資料をもとに「できます会」で指導者（Ｔ１）からのＡ児へのかかわり（発信）が非常に多いこと（４０回程度）、友達同士のかかわりを促すための工夫が足りなかったことなどが反省として挙げられた。そこで、①「蕪」を運ぶ際に、友達と協力することでしか運ぶことができないようにすること、②ボールプールでの遊びの際も、同じように友達と一緒にならば楽しめる遊びを用意することが提案された。また、③片付けでは、遊んでいるといつの間にか片付けができているということが提案された。

【できます会おいての確認事項】

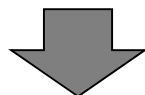
- ① 「蕪」を神輿に載せて運ぶ際に、神輿４本の持ち手を、一人一本持つように伝える。
- ② ボールプールでの遊びの際に、２人乗り用スライダーを用意する。
- ③ 片付け（ボール）の際に、スロープでボールを箱に流し入れられるようにし、遊びながら片付けが行えるように工夫しておく。

できますシート 1・2年ライフスタディ「レッツ！スマイル！」 平成29年10月18日版

だれが A児（小1） 長期目標：指導者や友達とかかわって活動する 短期目標：物を運ぶ時に、友達とペースを合わせて運ぶ 順番を守って友達と活動する 行動目標：「蕪」を運ぶ時に、友達とペースを合わせて運ぶ	
いつ 10月18日（水） 10時35分 ～ 11時20分	どこで 中棟1階 2-2教室・1-6教室
だれと 児童：小1児童1名・小2児童3名	指導者：T1・T2・T3
できる状況づくり <ul style="list-style-type: none"> 蕪を持ち上げて運ぶことができるように、蕪は神輿に乗せて運ぶ ペアになる友達が分かるように、写真カードを提示したり、ペアの友達に誘ってもらったりする 	支援 <ul style="list-style-type: none"> 意欲を持って運ぶことができるように、運ぶ時に「うんとこしょ、どっこいしょ」と言葉かけして盛り上げる ペースを合わせて運ぶことができるように、「いちに、いちに…」と言葉かけする 持つ箇所や持ち方を指さし言葉かけで示す 神輿が傾いたり手を離しそうになったりしたら、指さし言葉かけをする



こんなことができた（手だて付きで記入） <ul style="list-style-type: none"> 神輿を使うことで、友達と一緒に運ぶことができた <p>☆パネルシアターの活動場面において、友達とのかかわりは無かったが…☆</p> <ul style="list-style-type: none"> 「せーの！」と掛け声を言っていた （自発的に「蕪」を引っ張る動作や言葉は見られた）



<p align="center">「できる」をひろげるためのアイデア</p> <p>こんなシチュエーションなら…，こんな手だてなら…，こんな時だったら…，こんな教材なら…，など</p> <ul style="list-style-type: none"> T1が全ての児童を把握し指導するつもりで授業を作り，T2は黒子として動く 次回，T3は本当に必要な時だけ動いて，基本的には引いて見守る。それにより，児童が主体的に活動できるようにしていく 友達とのかかわりを増やすために，友達がいないとできない活動を入れてみる。ボールの上を滑るマットに2人乗らないと動かないとか… 友達を誘わないといけない必然性を取り入れる コロコロボールを改良して，さらに児童の興味を引く パネルシアターでの見立て遊びを，さらにリアルに再現した“劇遊び”にして児童が参加しやすいようにする あえてペースを合わせにくい児童とペアで運ぶ設定をし，相手のペースに合わせられるようにする
--

授業観察シート

対象授業：11月22日（水） 1・2年ライフスタディ「レッツ！スマイル！」										
対象児童：A児（学年：小1）										
スケジュール・備考	分	T 1	T 2	T 3	A	L	M	N	O	
授業開始	0									
呼名	1	●			○					
大きなかぶパネルシアター	2	●			○					
「蕪」をひっぱる 紐を渡される	3				○	●				
	4	●		●	○					
	5									
	6	●			○					
	7				●	○				
	8									
	9	●		●	○					
	10	●			○					2回
	11	○			●	○	●			
「蕪」を運ぶ説明	12	●			○					
	13	●			○	●				
お神輿で「蕪」を運ぶ	14	●			○					0回
	15	●			○					
	16									
	17									
	18	●	●		○					かかわる児童の幅が顕著に広がっている
	19									
ボールブール	20	○			●	○				
2人乗リスライダ...出てくる	21	●			○	●				
	22	●			○	●				
	23		○		●	○				
	24				●	○				
	25	●	●	●	○	●				
	26		●	●	○	●				
ボールころがし出てくる	27			●	○	●				
	28	●			○	●				
	29				●	○				
	30	●			○	●				
	31	●			○	●				
	32	○			●	○				10回
	33			○	●	○				
ボール片付け	34	●			○					
	35	●	○	●	○	●				
	36		●		○					
	37		●	●	○					
	38				○	●				
	39		●	●	○					
	40			●	○					
	41	●			○					1回
	42		●		○					
	43	●	●		○					
	44		●		○					
	45	●	●		○					
	46	●			○					
片付け終了	47	●			○					A児から指導者や友達へのかかわりの回数 合計13回
	48									
	49									
挨拶	50	●			○					

指導者とのかかわりの回数

T 1：25回

T 2：11回

T 3：8回

【資料Ⅱ—5】A児の授業観察シート②

【資料Ⅱ－５】は、「できます会」を受け、改善を図った後の授業の資料である。この資料から読み取れることは、子ども同士のかかわりが顕著に増えたということである。特にボールプールでの活動の際に２人乗り用スライダーが登場することで子ども同士のかかわり・Ａ児発信のかかわりが出ている。活動が設定されているパネルシアターや「燕」を引っ張る活動・「燕」を運ぶ活動よりも、比較的自由度の高いボールプールでの活動の際に、かかわりが増えたことは、かかわりの苦手なＡ児にとって意義のあるものだと感じる。前回よりも主指導（Ｔ１）とその他の指導者（Ｔ２・Ｔ３）との役割分担や配置、支援のタイミングなどがより明確になったことも、Ａ児を含め他の子どもたちの活動が積極的になった要因の１つであると考えられる。現時点のＡ児は、まだ大人とのかかわりが中心の段階だが、Ａ児の興味関心の高い遊びや教材、指導者を介して、「一人より友達と一緒にの方がさらに楽しくなる」という経験を積み重ねていくことで、より人とのかかわりがひろがっていくと考えられる。

イ 「できる」を伸ばし「できる」を活かす学習の取組

～「学校」という場を超える取組～

- ・授 業 名：役割を担うユニット「学校だよりを届けよう！」
- ・期 間：平成２９年６月２９日～平成３０年２月１日
- ・回 数：年間１２回
- ・内 容：事前に指導者と一緒に考えた言葉を練習し、近隣の a 小学校の教員や b 児童館の職員に敬語を使って挨拶をしたり用件を伝えたりする。
- ・対象児童：対象児童 C は、慣れた人や場面では、大きな声で話すことができる。また、新しいことにも積極的に取り組もうとする児童である。特に、友達や指導者と会話をすることが好きで、自分のことをたくさん話しかけてくる。反面、慣れない場所や初めての人と話す時には、声が小さくなったりうつむきながら話したりし、伝えるべき内容が正しく伝わらないことがある。本人の将来の生活を想定したときに、自分の思いを様々な環境において伝えられるということは重要になってくると考える。月２回（第１木曜日：a 小学校・第３木曜日：b 児童館）の今回のような学習を

通して、正しい言葉遣いであったり適切な声の大きさを伝えたりする力を付けていくことが大切であると考える。

- ・ 長期目標：

周囲の人と適切な言葉でやりとりをする。

- ・ 短期目標：

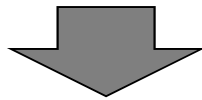
職員室や配達先などで敬語を使ってやりとりをする。

【資料Ⅱ－6】から、本授業でのC児の成長を読み取ってみると以下のようになる。6月から取組を重ねることで、台詞カードを用いて相手に聞こえる声で伝えることができるようになった。台詞カードに書かれてある文章は敬語で書かれているが、読み終わった後は「できた」「ありがとう」と敬語ではなくなることが多い。自分から敬語を使うことを意識できるように、台詞カードを読むのではなく、自分で考えたことを何も見ずに話してみてはどうかと考えた。そこで、7回目は台詞カードなしで実践をしたところ、カードがない緊張からか、うつむいたままで、言うことができなかった。台詞カードを手渡すと、小さな声だが言うことができた。振り返り際には、「今日は言えなかったけど、次はがんばる」と言い、自ら次回頑張るという意欲を見せた。事後のできます会では、台詞カードを用意しておくことも必要だが、キーワードを書いたメモを用意し、事前にどちらを使って言うのかを本人が決めてはどうかという意見が出された。そこで9回目は、事前にメモか台詞カードかどちらを使うかを本人が決めるように設定した。本人は、出発前にはメモを使うと決めたが、到着すると、緊張から台詞カードに変更するというのを指導者に伝えてきた。結果、この回では台詞カードを見ながら敬語を用いて言うことができた。

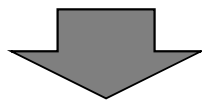
	できる 状況づくり	支援	こんなことができた	「できる」を 広げるための アイデア
10月 19日 (6回目)	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に教室で練習する ・台詞カードの「です」「ます」等の色を変える 	<ul style="list-style-type: none"> ・話すことに集中できるように指導者が台詞カードを持つ ・敬語を使うことを意識できるように、指導者は敬語を使用する 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員の方が聞こえる声で台詞カードを読むことができた ・出る前に自分から「ありがとうございました」と言うことができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で考えた内容で、台詞カードを読むよりも考えたことを言うだけの方が敬語を意識して話せるのではないかと ・事後に確認できるようにビデオを撮る
11月 2日 (7回目)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で敬語を使うということを意識できるように、学校だよりのおすすめの記事を自分で決める ・本人がどのように話していたかを確認できるようにビデオを撮る 	<ul style="list-style-type: none"> ・敬語で話せた時は、どこが良かったかを的確に伝えて褒める ・考えて話せるように初めは台詞カードを持たないようにする ・話すことに詰まった時は台詞カードを渡す 	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張からか台詞カードがないとうつむいたままに言うことができなかった。指導者が台詞カードを渡すと小さな声で言うことができた。 ・出る前に自分から「ありがとうございました」と言うことができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・キーワードを書いたメモを持って伝える ・メモを持って話すか台詞カードを読むか本人が決める設定する
12月 21日 (9回目)	<ul style="list-style-type: none"> ・キーワードを書いたメモと台詞カードの両方を用意する ・事前にメモを見ながら話す機会を設ける ・メモを持って話すか台詞カードを読むか本人が決める設定する 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉に詰まった時はキーワードを側で言う。それでも言えない場合は台詞カードを渡す 	<ul style="list-style-type: none"> ・出発前はメモを見ながら話すと言っていたが、到着すると台詞カードを使うと言い、台詞カードを見ながら言うことができた 	<ul style="list-style-type: none"> ・出発前に自校の職員室で練習してみたらどうか ・台詞カードの場合、文末の「です」「ます」等を消してみてもどうか

【資料Ⅱ－6】C児のできますシートより抜粋

だれが	児童C（小6） 長期目標：周囲の人と適切な言葉でやりとりをする 短期目標：職員室や配達先などで敬語を使ってやりとりをする	
いつ	12月21日（木） 12時30分～13時15分	どこで b 児童館の玄関
だれと	児童：児童C（小6） 指導者：指導者T1，指導者T2	
できる状況づくり <ul style="list-style-type: none"> ・自分で敬語を使うことを意識できるように，自分で文章を考えて言う ・キーワードを書いたメモと台詞カードの両方を用意する ・どのように話せばわかりやすいか，どのようなことを伝えるかがわかるように，事前に学校で練習する時間を設ける ・本人がどのように話していたのか確認できるように，ビデオで記録を取る 		支援 <ul style="list-style-type: none"> ・どんなことを言うのか考えられるように，学校だよりに掲載しているトピックスや内容について説明する ・どんなことを話せばよいのか思い出せるように，言葉が詰まってしまった時にはキーワードを伝える ・自信を持って臨めるように，練習で適切に話せた時に褒める ・自分の言葉で話す，丁寧な言葉で話すといったことができた時には褒める



こんなことができた（手だて付きで記入） <ul style="list-style-type: none"> ・出発前はメモを見ながら話すと言っていたが，到着すると台詞カードを使うと言い，台詞カードを見ながら言うことができた
--



「できる」をひろげるためのアイデア こんなシチュエーションなら…，こんな手だてなら…，こんな時だったら…，こんな教材なら…，など <ul style="list-style-type: none"> ・出発前に自校の職員室で練習していたらどうか ・台詞カードの場合，文末の「です」「ます」等を消してみてもどうか

ウ 交流及び共同学習（居住地校交流学習）

～「学校種」を超える取組～

地域や同年代の児童集団の中で児童が「できる」を発揮できるよう、担任引率を推進し、居住地校との情報共有を図りながら取組を進めていった。

小学部においては、昨年度より交流及び共同学習、特に居住地校交流に焦点を当てて「学校種」を超える取組についての研究を推進している。

校内組織の調整により、対象児童のK児の担任引率を毎回行えるようにすることで、実りのある交流及び共同学習ならびに深みのある研究推進を図ることができるようにした。

昨年度、1年間のc小学校との交流及び共同学習を通して、K児は交流教室に落ち着いて入ることができるようになった。また、初めは交流学級の児童に対して顔をそむけるなどの態度であったが、時間が経つにつれかわりを受け入れることもできるようになってきた。これらの成果の要因としては、活動内容の打合せを綿密に行ない、自校内での事前学習の積み重ねを図ったことが挙げられると考える。これらにより、交流及び共同学習（居住地校交流学習）に見通しを持てるようになって、楽しんで活動に参加ができるようになった。

これらの状況づくりや支援を、今年度も継続するようにした。今年度は、年間を通してひとつの学級と交流を行うのではなく、2年生の全ての学級と交流を図るようにした。その際に活動内容や「できる」ための状況づくりや支援などの確認を行なった。

	交流日程	交流内容	集団参加の形態	交流クラスと主となる企画者	支援体制
第1回	5月30日 (水) 5時間目	<u>体育</u> ・自己紹介(一人で) ・運動会種目練習 80m走 障害物競走	担任の支援のもと、K児と交流学年児童全体で活動。種目は担任や交流学年主任や近くの走順の児童と練習。種目練習以外は担任の見守りで活動。交流学年の指導者の指示(座る・立つ・移動・こちらを向く等)も入る。	<u>学年全体</u> 本校担任＋交流学年主任(出場種目の検討、日程調整等)	○担任支援 ○母見守り
第2回	5月31日 (木) 1時間目	<u>体育(全校練習)</u> ・入場・準備体操・縦割り種目の練習	母や交流学年主任の支援のもと、K児が交流学年を中心に全校児童全体で活動。種目練習等に参加。種目練習以外は担任の見守り <u>全体</u> で活動。交流学年の指導者の指示(座る・立つ・移動・こちらを向く等)も入る。	<u>学年全体</u> 本校担任＋交流学年主任(出場種目の検討、日程調整等)	○母支援 ○交流学年の体育担当の指導者全体指示・支援
第3回	6月4日 (土) 8:30～ 16:00	<u>運動会</u> ・開会式で自己紹介(交流校校長の紹介で校長の横に立ち、担任の遠目のサインや合図等の支援で)一人でマイクで挨拶 ※昼食は担任・父母と4人で教室で。 ※クールダウンに体育館で大きな声を出したり走ったりした(担任・父の見守りで) ・準備体操・2年障害物走・80m走、・縦割り競技(玉入れ)出場種目は一人で(友達のサポートあり)参加	担任や父母の支援のもと、K児が交流学年を中心に全校児童全体で活動。応援席で:担任が隣に座る支援のもと、1年～6年が座る席で静かに座って参加。近くの席の児童とは1対1の関わりも。 種目(出番待ち)で:双子の姉を中心に種目ごとに同じ走順の児童や近くの児童からの関わり。大きな集団の中に入っただけの活動であったが、1対1の関わりも。見通しが持て、担任以外の指示や関わりでも行動へ	<u>学校全体</u> 本校担任＋交流学年主任(出場種目の出方、座席・クールダウン用の場所や当日の動きについて等)	○担任支援見守り ○父・母見守り
第4回	7月13日 (木) 4時間目・給食	<u>K児から</u> ・自己紹介とクイズ ☆挨拶・自己紹介は指導者と一緒に ☆クイズは写真を使って、紙芝居形式に事前に書いた作文を読み上げ、手を上げた児童をあてる <u>お楽しみ会</u> 交流児童の自己紹介・フルーツバスケット <u>給食交流</u>	K児の自己紹介やクイズ、フルーツバスケット(円形に椅子を並べて)や歌のプレゼントは、担任の支援のもと、K児と交流学級児童全体で活動。交流学級児童の自己紹介では、各児童の席にK児が移動し、K児が前に立つと自己紹介をされ、握手やタッチを行う(1対1で活動)。給食は担任と小集団(班)に入って机を向かい合わせて食べる	<u>2年1組</u> 本校担任＋交流学級担任(お楽しみ会の内容等)	○担任支援 ○母見守り

第5回	9月19日 (火) 4時間目・給食	<div>K児から</div> <ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介とクイズ <div>☆挨拶・自己紹介は指導者の合図で一人で行う</div> <div>☆クイズは写真を使って、紙芝居形式に事前に書いた作文を読み上げ、手を上げた児童をあてる</div> <div>お楽しみ会</div> <div>交流児童の自己紹介</div> <div>ハンカチ落とし</div> <div>給食交流</div>	K児の自己紹介やクイズ、ハンカチ落とし(円形に座る)は、担任の支援のもとK児と交流学級児童全体で活動。交流学級児童の自己紹介では、各児童がK児の座る席の前に1列に並び、一人ずつ自己紹介、握手やタッチを行う(1対1で活動)。給食は、担任と小集団(1~6年生までの縦割りグループ)に入って食べる。そこで各自が自己紹介等を順番に行う	2年2組 本校担任＋交流学級担任(お楽しみ会の内容等)	<div>○担任支援</div> <div>○母見守り支援(ゲーム中)</div>
第6回	11月20日 (月) 4時間目・給食	<div>K児から</div> <ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介とクイズ <div>☆挨拶・自己紹介は指導者の合図で一人で行う</div> <div>☆クイズは写真を使って、紙芝居形式に事前に書いた作文を読み上げ手を上げた児童をあてる</div> <div>お楽しみ会</div> <div>ビンゴゲーム(交流児童の自己紹介も含む)、ボール送り</div> <div>給食交流</div>	K児の自己紹介やクイズ、ビンゴゲーム(交流児童の自己紹介)、爆弾ゲーム(円形に置いた椅子に座って)は、担任の支援のもと、K児と交流学級児童全体で活動。交流学級児童の自己紹介では、ビンゴの数字ごとに、児童が一人ずつK児に向かって自己紹介をする。給食は担任と双子の姉のいる小集団(班)に入り机を向かい合わせて食べる	2年3組 本校担任＋交流学級担任(お楽しみ会の内容等)	<div>○担任支援</div> <div>○母見守り支援(ゲーム中)</div>
第7回	12月12日 (月) 4時間目・給食	<div>K児から</div> <ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介とクイズ <div>☆挨拶・自己紹介は指導者の合図で一人で行う</div> <div>☆クイズは写真を使って、紙芝居形式に事前に書いた作文を読み上げ、手を上げた児童をあてる</div> <div>工作</div> <div>クリスマスの飾り作り</div> <div>給食交流</div>	K児の自己紹介やクイズ、工作の説明等は、担任の見守りで、K児と交流学級児童全体(小集団)で活動。工作は、少集団の中で担任の指示(主指導)、母の見守りで工作活動。担任は声かけ程度の関わり。母は見守りつつ、言葉かけや指さし等の支援。給食は、小集団の中で給食当番として、1品配る。円形に座り、小集団で食べる	育成「さくら学級」 本校担任＋交流学級担任(工作の内容等)	<div>○担任主指導支援</div> <div>○母見守り支援(工作中)</div>
第8回	1月29日 (月) 4時間目・給食	<div>K児から</div> <ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介とクイズ <div>☆挨拶・自己紹介は指導者の合図で一人で行う</div> <div>☆クイズは写真を使って、紙芝居形式に事前に書いた作文を読み上げ、手を上げた児童をあてる</div> <div>体育(バラエティ走)</div> <div>児童の考えた物含む</div> <div>給食交流</div>	K児の自己紹介やクイズ体育の移動や集合等は、担任の見守りで、K児と交流学級児童全体(小集団)で活動種目は、小グループに分かれて取り組む内容であったが、内容が難しいので、学級の担任説明後、担任は手本を示しながら補足の指導・支援を行う。全体では、担任と母の支援と見守りで活動。できることは、見守りや言葉かけの支援。給食は、小集団の中で給食当番として、1品配る。円形に座り、小集団で食べる	2年4組 本校担任＋交流学級担任(バラエティの内容等)	<div>○担任見守り支援</div> <div>○母支援(ゲーム給食)見守り</div>

【資料Ⅱ—8】平成29年度c小学校との居住地校交流 日程・内容等

今年度は、運動会での全校児童との交流をはじめ、学年全体、2年生の各クラス、育成学級、たてわりグループ（給食）等様々な集団に入っでの交流学習に取り組んだ。毎回の大きなスケジュールを同じにしたり、ゲーム・工作等といった活動内容に事前に取り組んだりすることで、落ち着いて活動に取り組むことができた。

日々の本校の実践において、重点的にK児に対して「聞く力」を育成してきた。昨年度は、学習内容や動き等を一斉指示のみで理解することが難しく、本校の担任の言葉かけが必要であった。しかし、取組の成果もあって、交流学級の指導者の一斉指示の時や代表児童の質問等の際に、話す人の方に視線を向けながら、内容を聞くことができた。そして、その指示等に対して、動き出したり答えたりすることもできるようになった。また、自己紹介の時に、事前にK児と作ったクイズや頑張っていること、好きなこと等を読み上げるようにした。これら伝える場面では、徐々に声も大きくなり、一人で文を読むことができた。それに対しての、友達からの質問等を聞き、答えを言うこともできるようになった。その際に笑顔やリラックスした表情も見られ、人前で読むことに自信を持てたように感じられた。

このように事前の準備や日々の自校での取組の積み重ねにより、K児の「できる」を居住地校でもひろげることができた。交流校の名前を言うと、「こうりゅう、ママ、せんせい、（〇〇：K児の名前）行くの」「〇〇（姉の名前）、△△（兄の名前）、がっこう」等と交流及び共同学習に行くことや居住地校について話すことができていく。これらの姿は、本人にとって居住地校がよく知った場所・安心して活動できる場面になってきているからこそではないだろうか。

保護者の変容としては、K児を信頼して見守る様子が多く見られるようになってきたことが挙げられる。K児の「できる」を多くの人に知ってもらいたい、何よりK児に楽しく交流してもらいたい気持ちが強くなっておられる様子で、K児本人にも「〇〇楽しかった？」「上手にできたね」等と穏やかにかかわり、一緒に楽しむ姿も増えてきている。

今年度の交流及び共同学習の内容は、行事やお楽しみ会、そして単発的な内容の図画工作や体育で行なった。交流及び共同学習の回数は、おおよそ1

か月に 1 回位の頻度で 8 回実施することができた（1 月末まで）。交流学級が毎回違うということで、交流学習の実施にむけて、毎回各担任や担当者と連絡を取り合い、学習内容を練り確認を行うことが重要であった。内容を考えるにあたっては、K 児の実態や前回までの交流内容や指導方法、子どもたちの様子、K 児や保護者の思い等を交流学級指導者に伝え、交流学級の児童の実態を聞いた上で交流内容の方向性を相談していった。

今年度の交流は、各学級で行なうため、K 児とはじめて交流する児童や久しぶりに会う児童がいる。そこで、K 児のことを交流学級児童に知ってもらい、考えてもらった上で交流を行なうということに重点を置き取組を進めた。交流校の各担任には、K 児の実態を学級活動などで事前に伝え、各学級において「K 児と何がしたいか」「K 児がどのような活動なら楽しむことができるか」等、K 児を迎えるための内容を考えてもらうようにした。そして、交流学級児童の K 児への理解を深めるために交流後には、K 児について知ったことや思ったことを振り返る時間を設けるようお願いした。

今年度の交流及び共同学習を実施する上で特に大切にしてきたことがある。それは、K 児にとって「できる」場面を毎回 1 つ以上は設定し、「楽しかった」気持ちや達成感を感じることができるよう内容にしたことである。その際、「できる」力を発揮するために状況づくりと支援を適切に行うことも心掛けるようにした。そして、活動中に交流学級の児童とのかかわりが少しでも多く持てるようにすることで、K 児のことを知ってもらえる交流を目指した。

今年度は、担任主体から保護者主体の交流及び共同学習に移行することをねらった。部分的に保護者が K 児の支援につくようにし、本校の担任は、意図的に支援活動から見守り活動にするようにした。そのことで、昨年と比べ、K 児が保護者とともに学習を行う機会が増え、「お母さんと（一緒に）できた」という経験を多く積むことができた。

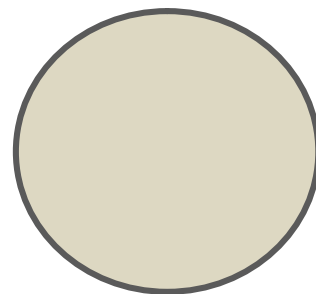
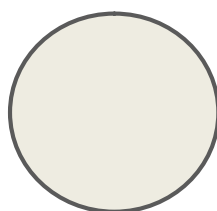
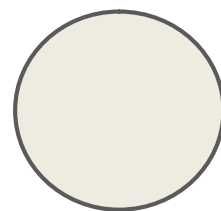
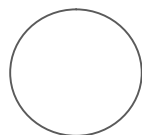
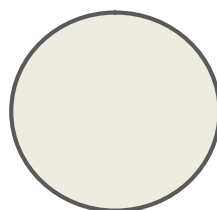
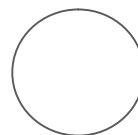
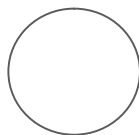
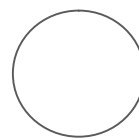
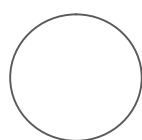
来年度も、今年度同様、K 児の交流及び共同学習は継続して行なっていきたい。この取組が K 児のよりよく地域で生きることに繋がってほしいと願っている。

3 成果と課題

今年度の小学部における各取組では、「できますシート」をもとに活発な協議を繰り返すことで、一人一人の子どもたちの課題と状況づくりや支援が明確になった。そこから授業に対する様々なアイデアが生まれ、新たな教材教具の工夫が図られることとなり、児童の「できる」につながっていった。

今後も一人一人の子どもたちの「できる」を育て、「できる」を活かす授業に取り組んでいきたい。そのためにも今回の研究で学んだことを学部全体で情報共有することで、学部教員全体の専門性の向上につなげていきたいと考える。また、本校研究計画に則り、「障害種を超える」「学校という場を超える」「学校種を超える」という、三つの場を超える教育の検証に向けて今後も取り組んでいきたいと考える。

Ⅲ 中学部の取組



Ⅲ 中学部の取組

1 研究テーマ

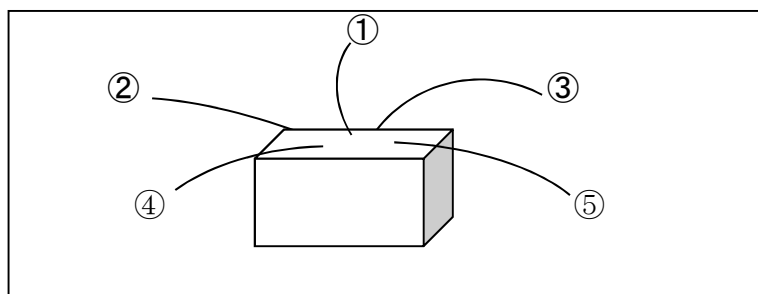
「生徒が地域で『できる』を発揮するための状況作りと支援

～家庭や地域につながる授業の展開～

(1) テーマ設定の理由

中学部では、「学校や家庭や地域のかかわりの中で，自ら考え，自ら活動する」ことを教育目標として定め，教育実践を進めている。生徒が家庭や地域で，自ら考え自ら活動するためには，生徒が家庭や地域でどのように生活をしているのかを知る必要がある。中学部では，生徒一人一人に「活動パッケージ」（＊１）を作成してきた。生徒が地域の中で，願いがあるのに実現できていないものは何か，何があれば実現できるのかを考え，そのために必要なものを「活動パッケージ」に詰めた。その「必要なもの」については，学校や家庭や地域のそれぞれの場面で取り組んでいく。できる状況を作り，適切な支援をしていくことで，生徒は，ひと・もの・こととのかかわりを広げ深め，「できる」自分を知り，自ら考え，自ら活動するようになるのではないかな。

（＊１）活動パッケージ：生活地図を基に，一人一人の生徒が，それぞれの地域でどのように生活しているのか，何があれば生徒の願いが実現できるのかを分析し，必要な学習活動をまとめたもの。例えば，車いすで長い時間散歩をしたいある生徒の「地域のトイレでスムーズに移乗ができるようになるための活動パッケージ」には，①立ち座り，②自分から立とうとする意欲を引き出す，③トイレで移乗する，④トイレの場所など環境把握をする，⑤立つ活動以外でいろいろな場面で自分から積極的に取り組もうとする，などの学習が詰まっている。



「地域のトイレでスムーズに移乗ができるようになるための活動パッケージ」

中学部では，学校周辺の地域や居住地域で活動する「地域ユニット」を設定し，生

徒が学校以外の場所で「できる」力を発揮できるように取り組んできた。「地域ユニット」とは、学校周辺の地域や居住地域で活動するユニットのことで、生徒が実際に地域に行って、地域の人と交流をしたり、地域の施設を利用したり、地域作品展の宣伝をしたりするなどの取組を積み重ねてきた。昨年度は、「活動パッケージ」をもとに、生徒が地域の中で目指す姿を確認し、必要な学習活動をまとめ、居住地域ユニットを新たに作って追加した。また、スキルの向上を目的としたスキルユニットも設定し、家庭での役割活動として考えられる掃除や洗濯、調理や買い物など、生徒の課題に分かれて学習を行い、生徒が自ら活動できるように取り組んできた。それらの取り組みの積み重ねで、生徒のひと・もの・こととのかかわりを広げることができ、学校だけではなく家庭や地域のより多くの場面で、生徒の「できる」姿が見られるようになってきた。

そこで、今年度も生徒が地域で「できる」力を発揮するための状況づくりと支援を考え、授業改善を行なっていき、生徒の「できる」姿を家庭や地域の人に伝え、つないでいくことを目指し、昨年に引き続いて上記のテーマを設定した。

（２） 今年度の研究の見通し

ア 生徒が自ら考え、自ら活動する授業

今年度は、「スキルユニット」から３つ抽出し、「できますシート」を活用して授業改善に取り組む。対象生徒の「活動パッケージ」の中から必要な学習を選び、「できますシート」を作って授業に臨み、支援や手立ての工夫など生徒の目標に迫るために授業改善を行っていく。

合わせて、週に１度、授業準備などユニット担当で集まる機会を設定し、生徒の情報や状況づくり、支援の共有を図り、自ら考え、自ら活動できるような授業づくりを行う。必要に応じて学年主任がコーディネータとして入り、授業改善に取り組む。

また、ユニット担当者・担任は、取組の成果が家庭や地域につながっているという意識を持ち、学校だけではなく、家庭や地域生活でも生徒が「できる」力を発揮できるような授業づくりをする。

来年度は「スキルユニット」で培ったスキルをどのように地域で活かせるのかを、「地域ユニット」に焦点を当てて、検証を行っていきたい。

イ 地域ユニットの充実

「地域ユニット」の充実を図るために、生徒が地域でどのような生活をし、願いを実現するためには何が必要なのかを分析したそれぞれの「活動パッケージ」を持ち寄って、「地域ユニット」に必要な学習活動をまとめる。2・3年生は「活動パッケージ」の更新をする。また1年生に関しては新たに作成をする。

「活動パッケージ」は、年度中に評価（できたことや課題）を簡単に記入しておき、来年度の更新に活かせるようにする。

「スキルユニット」で培ったスキルを「地域ユニット」で活かすことができるように、ユニット間でも連携して、授業づくりを行う。

ウ 交流及び共同学習

生徒が地域の同年代の生徒と交流する場の中で、「できる」力を発揮する状況づくりと支援を考え、居住地校や学校間の交流及び共同学習の充実を図る。居住地校や学校間交流の学校の指導者と、状況づくりや支援を共有していく。

2 研究報告

(1) 授業づくりと授業改善①

ア 課題と活動パッケージ

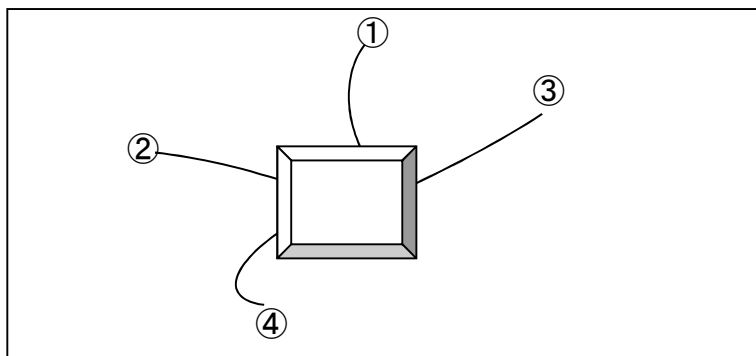
Eは、電車などの乗り物や戦隊もののキャラクター、NHKのテレビ放送などが大好きである。家庭や学校の休み時間に、自分で見たいものをタブレット端末で検索して見ている。居住地域では、ヘルパーと一緒に買い物に行ったり、ゲームをしに行ったりしている。

Eは自分の思いや言いたいことがたくさんあり、周りの支援者や友達に伝えようとするが、吃音があるために上手く伝わらないことがある。本人も伝わらずにあきらめることがあるので、周りの指導者が本人の言いたいことを予測して「○○?」「○○?」と聞いていた。しかし、そうするとますます言えなくなってしまうので、あれこれ聞くのではなく、ゆっくり待って、本人から言えるようにしている。友達との間でもそれができるように、クラスの生徒にもEが話し終わるまで待つように伝えている。

Eは好きなことに関してはルールを理解し、活動することもできるが、集団の中では、早くやりたいために順番が守れなかったりすることがある。ルールを守って、友達とやり取りしながら遊べるようになってほしい。

また、Eは、クラスの係り活動にも取り組んでいる。クラスの中では自分の決められた仕事をやり遂げようとしているが、他の場面ではあまり積極的ではない。自分が興味を持ったことだけでなく、いろいろなことに自分から取り組んでほしい。そこで、学校や家庭、地域で役割を意識しながら自ら活動に取り組めるように、次のような活動パッケージを作った。

Eの活動パッケージ



Eが、学校や家庭、地域で役割を担った活動に自ら取り組むための活動パッケージ

学習や取組	具体的な内容
①一人でできることを増やす (個別課題で)	・手先を使った課題に取り組んだり、文字を読んだり、数を数えたりするなどの理解を深め、自信を持ってできることを増やす
②学校で役割を担った活動に取り組む (ワーク・クラス・学年で)	・ワークの運搬作業や、ポット洗い、軍手干しなど、決められた作業に取り組む ・保健室に健康観察ファイルを届ける、ゴミ捨て、給食カートを運ぶ、朝の会の司会など、役割を担った活動に、見守りのもと、なるべく一人で取り組む
③地域資源を利用する (桂・松尾ユニットで) (学年ライフで)	・公共交通機関を利用して居住地域に出かけ、どのようなところか、何をするとところか、また利用時のルールなどを知る
④地域の人とかかわる (桂・松尾ユニットで) (コミュニケーションユニットで)	・施設見学の際に、挨拶をしたり、物の受け渡しをしたりする ・決められたルールを守り、友達とやり取りのあるゲームをする

【資料Ⅲ－１】Eの活動パッケージ

イ 学習の内容と取組の経緯

（ア）コミュニケーションユニットの学習

今回はEの活動パッケージの中から、「④地域の人とかかわる」に焦点を当てて、研究を行った。

Eは、いろいろな指導者や友達とコミュニケーションをとったり、ルールを守って友達とやり取りをしたりする機会を増やすために、コミュニケーションユニットで学習している。コミュニケーションユニットは1－（1）で述べた「スキルユニット」の中の一つであり、簡単なルールのあるレクリエーションゲームを通して、他者への呼びかけや応答などの基本的コミュニケーションスキルを習得することと、ルールや決まりを守りながら他者と関わることを身につけることをねらっている。そのために、生徒がゲームなどの活動を楽しむこと、自分だけが楽しむのではなく、友達と協力しながら活動することを大切にしてきた。

活動内容は、フルーツカードめくり、缶つま、フルーツバスケット、相手の好きなもの当てゲームなどで、それぞれ簡単なルールを決め、前半・後半でほぼ1つずつの活動を繰返して行った。

（イ）Eがルールを守りながら、友達とやり取りをするための取組

Eは、指導者の言葉かけを聞いてほしいのルールが分かり、指導者が促すと友達を誘うことができていた。しかし、自分から次の活動に移ったり友達と関わったりすることは見られなかった。

そこで「できます会」を開き、Eがどうすれば自分から行動し、友達と関われるようになるのかを話し合った。

できますシート①

平成29年10月19日版

<p>だれが E</p> <p>目標：決められたルールを守り、友達とやり取りのあるゲームをする</p>	
<p>いつ 10月19日(木) 10時00分 ~ 11時40分 ; どこで 中棟3階 3-4教室</p>	
<p>だれと 10名の生徒</p>	
できる状況づくり	支援
<p>〈活動① - フルーツカードめくり〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・守らなければいけないルールをまとめたスライドを用意する ・フルーツのパネル3種類×4枚(りんご・いちご・ばなな)計12枚を用意し、方向と間隔を均等に置く ・黒板下部の上段に生徒写真と名前が書かれたカードを貼り、かつその上に「いまはこのひと!」矢印を用意し、自分の順番を認識できるようにする。また、下段には選んだペアの生徒の写真を貼れるようにしておき、自分のペアの友達を認識できるようにする ・カードがそろっているかを確認するとき、指導者が横につく 	<p>〈活動①〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動が始める前に、用意したスライドを提示し、手本を交えて説明する。活動中にルールを破ったりしそうな場合は、スライドを見るよう促したり、言葉かけをしたりする ・生徒の顔写真を数枚提示して、「どの人と組む?」と聞く ・せりふが出ない場合は指導者が言葉がけする
<p>〈活動② - 缶カン ツムツム〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・赤・青・緑・黄・桃・白の6色の缶と「カンカン屋さん」に渡す色カード(缶と同色/箱に入っている)、ルールをまとめたスライドを用意する ・缶が倒れた時に、友達に「かんをなおしましょう」と呼びかけができるように、首からせりふカードをかける 	<p>〈活動②〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動が始める前に、缶の色を指導者と確認する ・呼びかけをしないときは、「みんなに声をかけて」と言葉がけをする
<p>〈活動③ - フリスビー〉(※時間の都合上、カットあり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・frisbeeを投げる位置を、養生テープを床にはってわかりやすくする 	<p>〈活動③〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・投げる位置が近い場合、指導者が「近いです」と言葉がけする



こんなことができた(手だて付きで記入)

- ・「あってますか?」の指導者の問いかけに「あってます」と言うことができた
- ・友達を誘う時に指導者が促すと、「一緒にやろう」「お願いします」と言葉でやり取りすることができた
- ・「缶をください」「ありがとう」と言って、缶をもらうことができた
- ・缶を積むことができた
- ・説明されている画面を注視することができた
- ・ルーティンで動くことができた(順番を待つ→2枚カードをめくる→帽子を渡すなど)



「できる」を拡げるためのアイデア

こんなシチュエーションなら…、こんな手だてなら…、こんな時だったら…、こんな教材なら…、など

- ・指導者に促されて話していることも多いので、自発的に話す場面を作る
- ・待ち時間が多いので、グループを小グループに分けて、生徒の活動時間を確保する
- ・フルーツカードめくりでペアになるが、友達を意識できるようにカードめくりをする(二人でカードをめくって合わせるなど)

【資料Ⅲ-2】Eのできますシート①

「できますシート」を更新して次の授業に臨んだ。(Eのできますシート②)(学校行事の取組でユニット学習がしばらくなかった。更新してから3回目の授業。)前半は、グループの人数を少なくし、役割をローテーションにしてルールを分かりやすくしたために、Eは自分から次の活動に進めるようになった。また、次の友達に言葉をかけたり、メダルを首にかけたりするなど、自発的に友達とやり取りをすることができた。

だれが E 目標：決められたルールを守り、友達とやり取りのあるゲームをする	
いつ 12月21日(木) 10時00分 ～ 11時40分	どこで (前半)中棟3階 美術教室 (後半)中棟3階 3-4教室
だれと (前半)3名の生徒 (後半)10名の生徒	
できる状況づくり <活動① - フルーツカードめくり> ・フルーツのカード3種類×4枚(いちご・おれんじ・きうい) 計12枚を用意し、方向と間隔を均等に、かつ生徒に1枚1枚見せながら置く ・4名の生徒にそれぞれ、「①カードをひく人」「②〇×を判定する係」「③ぼうしをわたす係」「④順番をお知らせする係」の役割を設定する ①～④の役割は、各生徒でローテーションする ・カードがそろっているかを確認するとき指導者が横につく <活動② - 缶つみ チャレンジ> ・赤・青・緑・黄・桃・白の6色の缶と「カンカン屋さん」に渡す色カード(缶と同色/箱に入っている)、ルールをまとめたスライドを用意する ・活動の流れを、指導者で実演する ・取り出しやすいよう、色カードに厚みをつける ・言葉が出なかった場合のために、カードの裏にお願いするときのせりふを明記しておく ・床に缶を置く場所に目印を置いておく ・グループで1人ずつ「かんかん屋」と「缶を直そう!とお知らせする係」の役割を設定する ・缶が倒れたときに、友達に「かんをなおしましょう!」と呼びかけをすることができるよう、首からせりふカードをかける	支援 <活動①> ・本人が動き出せるまで、黙って待つ ・せりふが出ない場合は、指導者が言葉がけする <活動②> ・呼びかけをしないときは、「みんなに声をかけて」と言葉がけする



こんなことができた(手だて付きで記入)

- ・自分からカードを引くことができた。自分がひいたカードを見て、「引いたのは〇〇と〇〇です。あってますか?」言うことができた
- ・人が引いたカードを見て、〇×の判定をすることができた。
- ・「お願いします」の友達の声かけに「はい」と答えることができた
- ・「次は〇〇さんの番です。よろしくお願いします」と言えた
- ・カードがあった時に、自発的にメダルを取りに行き、相手にかけることができた
- ・相手が持ってきた色カードを見て、同じ色の缶を渡すことができた



「できる」を拡げるためのアイデア

こんなシチュエーションなら…、こんな手だてなら…、こんな時だったら…、こんな教材なら…、など

- ・前半部分の活動では、自発的な動きがよく出ていたので、指導者は支援を少なくして、生徒たちに進行をまかせればいいのか?
- ・後半部分の缶つみに関して、生徒たちのやりたい気持ちを引き出す工夫が必要ではないか
- ・後半も分けて別室で行うことで、もっと集中して活動できるのではないか

【資料Ⅲ-3】Eのできますシート②

その後、Eは、指導者の言葉かけがなくても自分から前に出て、「次は〇〇さんの番です。よろしくお願いします」と言えるようになった。カードめくりのカードがフルーツからキャラクターに変わっても、同じようにゲームを進めることができ、友達にメダルをかける活動などがより積極的になった。

(2) 授業づくりと授業改善②

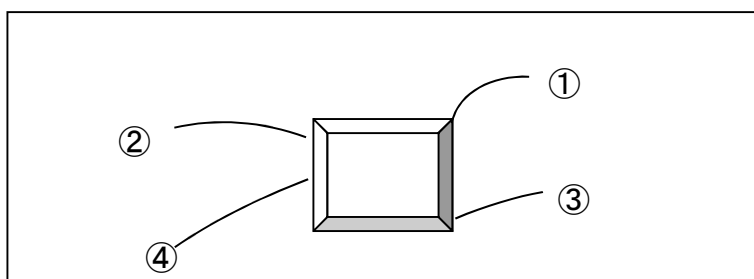
ア 課題と活動パッケージ

Dは、本を読むのが好きで、休憩時間には絵本や動物図鑑などを読んでいる。走るなどの身体を動かすことも好きである。

また、Dは、出かけることが好きで、家の近所で食後の散歩をし、ヘルパーと銭湯にも行っている。地域では他に、保護者と一緒に買い物に行き、一緒に店内を回って、お菓子などを買ってほしいことを伝えているようである。

できるだけ一人で信号を渡ったり、支援者の見守りのもとに買い物をしたりすることができれば、自信につながり、地域の中でより自立的に好きな活動を行えるようになるだろう。そこで、次のような活動パッケージを作った。

Dの活動パッケージ



Dが、地域の施設や公共交通機関を利用するための 活動パッケージ

学習や取組	具体的な内容
① 交通ルールを守って活動する（校外学習で）	・ 横断歩道で信号を確認して渡る ・ 友達や指導者とペースを合わせて校外を歩く
② 買い物の学習 （買い物ユニットで）	・ 指導者の見守りで、写真やイラストカードを手がかりに商品を探しレジで支払いをする ・ 商品を手に取り、寄り道をせずにレジへと向かう
③ 公共交通機関を利用するための学習 （ライフスタディで）	・ 静かにする、順番を守るなどのルールを守って市バスに乗車する ・ 市バスを利用する際に、福祉乗車証を提示しお礼を言って降車する
④ 言葉やカードの提示で、友達からものを借りる （クラス、右京ユニットで）	・ 担任に頼まれたものを、他のクラスに借りに行く ・ クラス以外の場所でも、メモを読みながらものの貸し借りをする

【資料Ⅲ－４】Dの活動パッケージ

イ 学習の内容と取組の経緯

(ア) 買い物ユニットの学習

今回はDの活動パッケージの中から、「②買い物の学習」に焦点を当てて、研究を行った。Dは見守りがあれば一人で買い物ができるようになるために、「スキルユニット」の一つ、買い物ユニットに入って学習している。買い物ユニットは、買い物に関する様々なスキルや課題を持った生徒で構成されている。頼まれた商品を見つけてレジまで持っていくことをねらいとする生徒が4名、それに加えてレジでの支払いまでを行うことをねらいとする生徒が4名である。それぞれの中でも、写真と商品のマッチングをする、数を理解する、売り場を聞くなど店員とコミュニケーションをする、買い物の流れを一人で行う、お金の理解をするという課題がある。そこで、それぞれの課題に合わせて、校内でシミュレーションをしたり、学校の近くの店で実際の買い物をしたりした。

(イ) Dが見守りの中で、商品探しから支払いまでの一連の流れを行うための取組

Dは、コンビニエンスストアや慣れた店だと、写真カードを見て、頼まれた商品を探することができる。支払いは、多めのお金を出しておつりをもらうという形をとっている。Dが、頼まれた商品を探して支払いまでの一連の流れを一人で行うことができるように、「できます会」を開いて話し合った。(Dのできますシート①)

<p>だれが D</p> <p>目標；指導者の見守りで、商品の写真を手掛かりに商品を探し、支払いまでの一連の流れを行う</p>	
<p>いつ 10月12日（木）</p> <p>10時00分 ～11時40分</p>	<p>どこで</p> <p>中棟3階 美術室，3－1教室</p>
<p>だれと 8名の生徒と</p>	
<p>できる状況づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・美術室にコンビニに似せた模擬店をつくる ・商品を種類別に陳列し，天井・机に売場のわかるプレートを配置する ・商品の写真を用意する ・商品の写真と財布を片手で持てるようにし，支払いの動作を補助無しで行えるようにする ・第2職員室の職員に頼まれたものを買って渡すという設定にする 	<p>支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・買い物の流れを事前に確認する ・困っている様子が見られた場合には，商品の写真を見るように促したり，言葉かけを行ったりする



<p><u>こんなことができた（手だて付きで記入）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真カードを見て，商品を選び，レジに持っていくことができた ・レジで金額を言われると，財布に入っているすべてのお金をだすことができた ・買った商品を相手に渡すことができた ・文字を読んで「〇〇を買いました」ということができた ・ふり返りで，指導者の「どちらを頑張りましたか？」の問いかけに，「かいもの，おとどけ」と書かれたホワイトボードの2択から選ぶことができた ・第2職員室に友達と一緒に移動することができた <p>（これまでの買い物学習で）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コンビニエンスストアや慣れている場所であると，頼まれたものの写真カードを見て，探すことができた ・商品をレジに持っていき，財布からお金を出すことができた



<p><u>「できる」を拡げるためのアイデア</u></p> <p>こんなシチュエーションなら…，こんな手だてなら…，こんな時だったら…，こんな教材なら…，など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・慣れていない場所や広い場所でも商品を探し，買い物ができるように，学習で利用していたコンビニやカナート，ドラッグストア以外の場所でも買い物をする ・おつかいができるように，買うものをなじみのないものにする ・商品を探し出せないときに，店員に聞くことができるようにする ・待ち時間が多かったので，ないように待ち時間を活用したり，グループ分けをしてそれぞれのグループで活動したりする

この「できます会」の後から、「課題分析アセスメント表」を使うようにした。コンビニエンスストアで買い物した時に記録したものが次の表である。(課題分析アセスメント表①)

スキルユニット 買物学習 課題分析アセスメント表

11月30日(木)

中学部 1年

氏名(D)

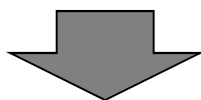
【行動目標】 指導者の見守りで、商品の写真を手掛かりに商品を探し、支払までの一連の流れを行う。	代行	手添え	触れてきかけ	言葉かけ	指さし	モデル	実物	カード	一人でする	コメント
店まで行く									○	おわりと一緒に
店の中に入る									○	接客を見守り。
写真を見ながら買うものが陳列してある場所を探す									○	
陳列場所が分からない時店員に尋ねる										
陳列台から必要個数、商品を取る									○	1個
レジに行く									○	
店員に商品を渡す					○					
お金を払う a) 財布ごと店員に預ける b) 決められたお金を財布から出して渡す (500円玉や千円札など) c) 支払うべき金額ちょうとを財布から出す d) ちょうと無い時に少し多い目の金額を払う					○○					「100円を2コ」の言葉かけも受けて出すことができた。
商品の入った袋を受け取る									○	今日はできたけど
お釣り、レシートを受け取り、財布に入れる									○	あやしい……
袋を持って店を出る									○	
備考										

【資料Ⅲ－6】課題分析アセスメント表①

その後、ドラッグストアでの買い物の時にも「できます授業」を行い、「できます会」を開いた。

できますシート②**平成29年12月7日版**

だれが D 目標：指導者の見守りで、商品の写真を手掛かりに商品を探し、支払までの一連の流れを行う	
いつ 12月7日（木） 10時00分～11時40分	どこで ドラッグユタカ桂坂店 中棟3階 美術室
だれと 7名の生徒と	
できる状況づくり	支援
<ul style="list-style-type: none">商品の写真を用意するお店に入る前、または商品を探しに行く前に、一緒に購入する商品を確認する指導者は離れたところで見守り、本人が一人で商品を探し、レジまで持っていくようにする財布を大きくし、お金の出し入れをしやすくする	<ul style="list-style-type: none">困っている様子が見られた場合には、商品の写真を見るように促したり、言葉かけを行ったりする財布からお金を取り出せないとき、「200円だから100円玉2枚だね」などと金種と必要枚数を伝える

**こんなことができた（手だて付きで記入）**

- 指導者が離れたところで見守ると、事前に写真カードで確認した商品を探し、レジに持っていくことができた
- 指導者の言葉かけで、空いている（店員に呼ばれた）レジに移動することができた
- 指導者が100円玉と100円玉を掲示すると100円玉を選び、支払いをすることができた
- 友達と一緒にバスに乗り、店に移動することができた

**「できる」を拡げるためのアイデア**

こんなシチュエーションなら…、こんな手だてなら…、こんな時だったら…、こんな教材なら…、など

- 買い物の始めと終わりを明確にし、できたことを買い物終了後すぐに確認する
- 列に並ぶ練習が必要。どこに並ぶのか分かっていない？
- 集団の中ではスムーズに活動することができているので、“今日のリーダー”として集団から離す、集団を引っばる役割を与える
- あえて失敗しやすい状況を作り、どうすれば良いのか考えられるようにする。
- 毎回の活動を記録し、指導者で支援の共通理解をする

【資料Ⅲ－7】Dのできますシート②

その後も、ドラッグストアに買い物に行った。支払いは、財布から全額を出してお

つりをもらう方法をとる、商品を探す活動の時に、あえて失敗するかもしれない商品
を指定した。

スキルユニット 買物学習 課題分析アセスメント表

/ 月 / 日 (木)

中学部

1年

氏名 (D)

【行動目標】 【場所】	手 添 え	触 れ て き っ か け	言 葉 か け	指 さ し	モ デ ル	実 物	カ ー ド	事 前 に 確 認	指 導 者 に 確 認	一 人 で す る	コ メ ン ト
店まで行く										○	エントのMは一緒に。
店の中に入る										○	
写真を見ながら買うものが陳列してある場所を探す			○								ヒートエあたふ。
陳列台から必要個数、商品を取る										○	1個
レジに行く										○	
レジで並んで待つ										○	
店員に商品を渡す										○	
お金を払う □財布ごと店員に預ける ☑財布から全額出す □決められたお金を出す(100円玉など) □事前に確認した金額を出す(300円など) □ちょうど無い時に少し多い目の金額を払う										○	全額でねえ子ように 入れてある。
商品の入った袋を受け取る										○	
お釣り、レシートを受け取る										○	
お釣り、レシートを財布に入れる										○	
袋を持って店を出る										○	
備考 店員に聞く、金種の学習が必要かも。											

【資料Ⅲ－8】課題分析アセスメント表②

商品は、袋入りのチョコレート菓子である。いつも買っている同じチョコレート菓

子が箱に入っているものなので、Dは、写真カードを見ながらも、袋入りの菓子を取らなかった。指導者の言葉かけを聞いてもう1度探すと、見つけることができた。いろいろな場合や場所で、Dが買い物の一連の流れをスムーズに行うことができるように、今後も買い物の学習を積み重ねるとともに記録をし、家庭や地域の支援者につなげていきたい。

(3) 交流および共同学習

ア 居住地校交流

今年度も以下のように、居住地校交流【資料Ⅲ－9】をすることができた。しかし、保護者の付き添いが難しかったり、お互いの学校の学習予定が重なったりして、交流の日程の調整が難しかったケースもある。生徒が居住地域で同年代の友達とかかわり、それぞれの良さを知り合って今後も「ともに生きる」関係になれるように、より良い交流の仕方を考えていきたい。

実施校	生徒	実施日	付添	内容 (育…育成学級と、全…全校行事)	状況作りや支援
A	a	6/19	担任、母	自己紹介と出し物、アフロのお話やさん、バルーンゲーム、玉入れ (交流先の中学校及び小学校を合わせた3校合同交流)	<ul style="list-style-type: none"> 内容を伝え、自己紹介の練習をした。本人の絵を持参して、紹介した 転倒防止のため、本人の傍で見守った
B	b c	7/11	担任1母2	自己紹介、絵合わせゲーム 育	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介カードの作成をし、事前に練習をした ゲームの順番が分かるように、順番カード、動作カード等を用意した
	b c d	12/15	担任1母3	自己紹介、クリスマスリースづくり、歌(クリスマスソングやリクエスト曲) 育	<ul style="list-style-type: none"> 自己紹介カードの作成をし、事前に練習をした ゲームの順番が分かるように、順番カード、動作カード等を用意した
C	e f	9/12	担任1母2	自己紹介 ハンドベル演奏(交流先合同練習と交流中学校の発表)、合唱 育	<ul style="list-style-type: none"> 事前に自己紹介ポスターを作って、育成学級の教室に貼ってもらった 西総合の生徒が発表する場を設定した
	e	9/15	母	文化祭鑑賞 全(保護者席での鑑賞だったが、たくさんの人が声をかけてくれた)	
	f	10/11	母	体育祭見学 全(保護者席での見学だったが、たくさんの人が声をかけてくれた)	
	e	1/23	母	ソフトバレーボール、昼食	<ul style="list-style-type: none"> 予定表と内容を提示した

実施校	生徒	実施日	付添	内容 (育…育成学級と、全…全校行事)	状況作りや支援
D	g	9/20	担任, 父	合唱コンクールの見学 全	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に合唱曲を鑑賞 ・交流会当日、歌詞カードを持参した
	g	10/18	父	歌唱、合奏（西の生徒はトーンチャイムを担当）	<ul style="list-style-type: none"> ・一人で取り組む姿を交流先の生徒に見てもらえるよう、扱いやすいトーンチャイムを担当した ・事前に練習する時間を設定した
E	h	9/21	担任, 母	自己紹介, リズム遊び, ダンス, 合唱, ハンドベル 育	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の興味関心に応じた複数の取組を設定した
	i	1/9	担任, 主任, 母	交流先学校の授業（美術）に参加, 昼食	<ul style="list-style-type: none"> ・車いすを3階まで上げ下ろしした ・本人と友達との関わりを見守った
	i	1/16, 23,30, 2/6,13, 20,27, 3/6,13, 20	主任他	交流先学校の授業（美術）に参加, 昼食	<ul style="list-style-type: none"> ・（同上）（昼食は、小学校時代から仲の良い生徒と一緒に食べているが、少しずつ生徒の範囲を広げていくようにしたい。授業中の席も、もう少し交流しやすいように、本人やE中の指導者と相談していく）
F	j k	10/20		テレビ交流 自己紹介 交流先生徒の発表（合唱, ハンドベル演奏）本校生徒の発表 （車椅子の自走, PCWを用いた歩行, 手話歌）育	<ul style="list-style-type: none"> ・両校で、事前にテレビがつながるかどうかなを確認する日を設定した ・自己紹介カードの製作 （テレビに映しやすいことを考慮し、四つ切画用紙に名前, 好きなことを記入した） ・交流先生徒が質問し、本校生徒が回答する場面を設定した
G	l	12/14	母	交流先生徒の発表（ミュージックベル, 出し物【小学校】, 和太鼓演奏【中学校】） 歌, プレゼント渡し	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に招待状のやり取りを行い, 会に向けての意欲を高めた ・見通しを持てるように, あらかじめ活動内容を提示した
H	m	12/11	母	ピザ作り（小中交流会）	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に、ピザの写真を提示してこねる・伸ばす動作を一緒にし, 以前作ったことを思い出せるようにした

【資料Ⅲ－９】実施した居住地校交流と実施予定

イ 学校間交流

中学部では、学校周辺の地域にあるE中学校と1年生の全クラスの生徒と学校間交流をしている。

今年度は2クラスずつ来校して、2回交流を行った。交流内容は、全体での開会式をした後、各教室で造形活動をした。学年ごとに色の系統を決めて絵を描いたり塗ったりしたものを正方形に切り、それをモザイク画のように貼り合わせてそれぞれ共同作品を仕上げ、お互いの学校で展示している。小学生の時に本校と学校間交流した経験があるE中学校の生徒は、事前学習もおこなってきたので、お互いにコミュニケーションを取りながら造形活動をすることができた。終了を告げると「もう、終わりですか？」と言うなど、名残惜しそうにしていた。

また、本校の生徒会本部の生徒がE中学校の文化祭で、鑑賞と発表をしている。事前にそのうち数名がE中学校に行って、顔合わせをした。顔合わせでは、自己紹介をした後、本校のダンスをE中学校生徒会本部の生徒に教えた。当日は、本校のダンスを、それぞれの生徒会本部の生徒がペアになってステージの上で踊った。生徒同士は和気あいあいと話をし、緊張が解けたようで、どの生徒も笑顔で生き生きと踊ることができた。参加した生徒の自信に繋がったようである。

3 成果と課題

(1) 生徒が自ら考え、自ら活動する授業

今年度は、「スキルユニット」に焦点を当てて研究を行ってきた。それぞれのユニットの担当で集まる機会を随時持ち、生徒の「できる」を活かせるように授業準備をした。「できます会」での話し合いは、新たな「できる」のアイデアや、それを実現するための状況づくり・支援を指導者間で共有することに有効で、授業の見直しにつながった。「スキルユニット」で培ったスキルをどのように地域で活かせるのかを、来年度に「地域ユニット」に焦点を当てて検証していきたい。

(2) 地域ユニットの充実

昨年度、新たな地域ユニットを開設したことで、校区内の全ての地域に居住地域ユニットができた。継続的に使用している「活動パッケージ」を活用することで、居住地域での生徒の課題を明確に知ることができ、課題に迫れるように様々な活動に取り組むことができた。「活動パッケージ」は、年度中に評価することができたので、

それをもとに来年度のケース会議で更新していきたい。

ユニット間の連携としては、ある地域ユニットで地域の特産品である柿を題材にした学習があった。柿狩りに行った後に、その柿でジャムを作り、柿狩りの時に拾った葉を煮て布を染めた。地域の作品展の時に、その染めた布で作った三角巾を巻いて、ワーク製品の販売を行った。ジャム作りでの調理やワーク販売での接客、宣伝など、それぞれの活動の時に、生徒がスキルユニットで学習した「できる」を活かせるように、ユニット間で連携を行い、取り組むことができた。来年度もこのようなユニット間の連携が増えていくように、取り組んでいきたい。

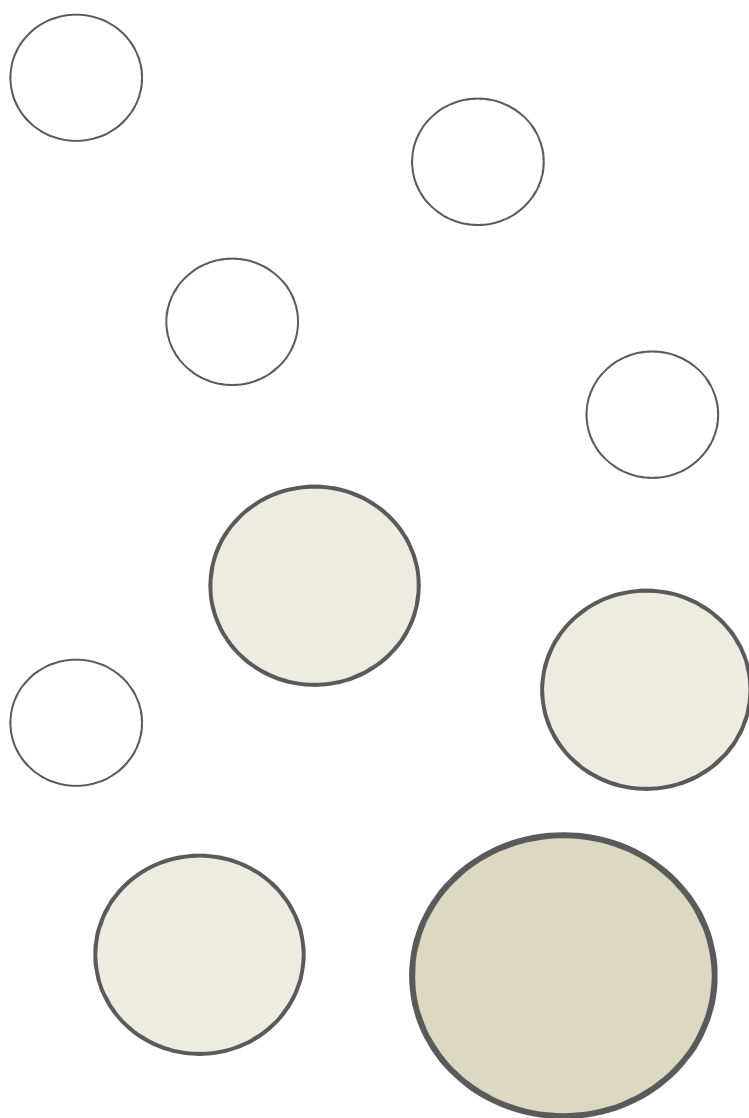
（３）交流及び共同学習

居住地校との交流及び共同学習においては、昨年度までの経験を積み重ね、居住地校との話し合いを重ねる中で、より良い交流を進めることができた。

近隣の中学校との学校間交流は、作品を残すことで交流の振り返りもできた。

来年度も、生徒が交流及び共同学習で「できる」力を発揮できるように、居住地校や近隣の中学校との連携を密にしていきたい。

IV 高等部の取組



Ⅳ 高等部の取組

1 研究テーマ

「卒業後を見据えた、『できる』が発揮できる授業づくりと支援

～移行後の継続的キャリアアップを目指して～」

(1) テーマ設定の理由

高等部では、生徒の目標に沿って「できる」を増やし、広げることを目指した授業を展開し、それが、卒業後にも繋がるものとなるようにしたいと考えている。

しかし、学校という「ひと、もの、こと」の整った環境の中での「できる」は、学校からの移行の場にそのまま繋がらない事例もみられる。その原因としては、二つの面が考えられる。一つは、指導者が移行後の環境などを十分に意識できていないために、活動内容や支援・手立てが卒業後に繋がらないこと。もう一つは、環境が変わることにより、生徒が自分の力を発揮しきれていないことである。そのため、高等部ではより卒業後への移行を見据えた視点を持ち、生徒それぞれの「できる」が移行先でも発揮できるように、環境が変わっても、「～すれば～できる」という情報を多く集め、伝えることで、それぞれの移行後にもキャリアアップしていける生徒の姿に繋がりたいと考えた。

(2) 研究の経過

上記で述べた研究テーマに迫るために、授業については、今年度も「できます授業」を通して、生徒の「できる」を見つけ、卒業後に繋げる取組、そのための支援と手立ての工夫をしてきた。それを実践事例として積み上げていきたい。

さらに、「学校という場を超える取組」として、産業現場等実習に取り組んでいるが、生徒が学校の外でも「できる」を発揮するためには、実習の後も学校でそれぞれの課題に取り組むことが必要であると考え、実習ノートと評価を回覧だけしていた今までと、一歩進めた取組をしていきたい。

また、これまで高等部では、「学校種を超える取組」としての学校間交流を行なってこなかったが、今年度は試行的に、生徒の居住区の中学校（育成

学級)との学校間交流を進めていきたいと考えている。生徒が地域に帰って、先輩としての姿を見せることで、学校の外でも「できる」を発揮する経験を積み、地域に生きる生活者としてもキャリアアップしていけることを願いたい。

(3) 研究の内容

ア 「できますシート」の取組

前述したように、生徒が「できる」を発揮するために、「できます授業」を各学年1つずつ設定し、実践を積み上げていきたい。その際、「できますシート」を活用しながら、支援と手立ての工夫や、授業内容の改善もねらいたい。支援と手立ての工夫は、移行の場に情報伝達していくことで、「できる」が卒業後も引き続き発揮できるようにしたい。また、授業の改善は、より生徒の卒業後に繋がるものとなるように、アイデアを出し合うことで、授業者一人一人の力量を上げていきたいと考える。

イ 三つの場を超える取組

(ア) 「学校」という場を超える取組

高等部では、1年生の間から全員の生徒に産業現場等実習に取り組むことを行なってきた。それは、学校でできたことを学校という場を超えて発揮できるようにし、また、学校外での課題を校内にフィードバックしていくための取組である。これまでは、実習後に実習ノートと評価を学年の先生やワークチーフなどに回覧してきた。この方法では、生徒が学校の外で求められていることが指導者に共通理解できないため、より様々な学習場面での生徒の課題への取組ができず、移行後に活かすフィードバックができないことも考えられる。そこで、生徒の実習後の課題についてワークチーフをはじめ、学部全員で共通理解すること、ワーク担当者会の時には、実習後の課題を話題にしてもらうことで、実践に繋がるようにと考えた。

(イ) 「学校種」を超える取組

「学校種」を超える取組については、これまで、学部としては取り組んでこなかったが、指導者の中から、ここ数年学校間の交流をしたいという意見が挙がっていた。昨年度の「交流及び共同学習推進プロジェクト」の中では、高等部の生徒が、自分の出身の中学を訪問することはどうか？というアイデアも出ていた。そこで、今年度は試行的に、生徒の居住地域の中学校の育成

学級との交流に取り組むこととした。今回の結果によって、来年度以降も継続的に行うことや、交流相手校を増やすことも考えていきたい。

2 研究報告

(1) 「できますシート」の取組

ア 1年生の取組

(ア) 生徒について

生徒 G は登校してもずっと下を向いて歩き、机に伏していることが多く、質問しても首を縦横に振るか傾げるかして答えるだけで、言葉を発せず下校する。入学して1年が経とうとしているが、一人で過ごすことが多い。中学生の時に関東地方から転校し、高等部から本校に入学してきたので、情報量は少なかったが、研究を通して生徒のことをもっと知ることができるのではと期待した。

(イ) 目標の設定と授業内容

将来的には、自分の身の回りのことは自分でできることが期待される G の長期目標は「家事ができるようになる」、短期目標が「炊事や調理、洗濯などに興味を持ち、自分から取り組む」であるため、学年ユニット「洗濯」の授業で他に6名の生徒と一緒に活動した。周りの生徒に刺激されながら洗濯のスキルを身に付けること、その中で少しでも仲間とのコミュニケーションが図れればと考えた。

(ウ) 授業改善と検証方法

6月頃から授業を開始し、「できます授業」1回目の観察は7月上旬に行なった、G が洗濯に興味を持つようにと、パーカー専用のハンガーや伸縮性のあるバスタオルハンガーを用意し、視覚的にも訴えるように「新しいハンガー入りました」とポスターを掲示した。生徒同士のかかわりもできるようにと、友達によく言葉かけする生徒とペアを組んだ。

結果は「新しいハンガーが入ったよ」という指導者の説明を聞き、ポスターに目を移し関心があるように見えたが、洗濯物干しが始まると、手元にあるハンガーだけを使って全て干し終えた。また、友達がどんどん干していく様子を見て、自分が干さなくても友達がやってくれと活動のペースが落ちた。指導者が新しいハンガーを使ってみようと使い方を説明すると、同じよ

うに使うことができたが、Gの表情は硬いままだった。

「できます会」で、Gが腕時計を大切に扱う様子から、自分の服なら興味を持って洗濯できるかもしれないという提案が出た。またワークスタディは「園芸」班に所属し毎回のよう軍手を使用している。その軍手を洗濯してみんなから感謝されるとモチベーションも高くなるのではとアイデアが出た。また、洗濯物を取りに行く（請け負う）ことで人とのやりとりが生まれるかもしれないと考えた。目標をスモールステップで設定し一人で役割を担うと、友達任せにはならず取り組むことができるとも考えた。

9月に家庭と連携し、G本人のシャツを用意し、活動内容をアイロンがけに変えた。本時の目標を「シャツのアイロン掛けで見本通りにしわを伸ばす」とし、活動を行なった。まずは簡単なハンカチのアイロンがけから始め、様々な型のスチームアイロンを準備して、自分で選べるように選択肢を増やした。7名のうち2名が実習に出ていたこともあり、静かな環境で活動することができた。（※【資料Ⅳ－１】参照）

アイロン掛けの作業は前回まで他の生徒が作業していたこともあり、注意点を聞いていたり、作業内容を見ていたりして、必要最低限の説明で順序通りに作業ができた。また、Gは直接指導を受けなくても、他生徒へアドバイスすることを聞いて自分の気づきにして、しわをのばすことができた。後半にスチーム機能を使ってハンガーに掛けたまましわを取る方法に興味や意欲を持てた様子があり、表情がとてもよかった。

12月には目標を「自分のシャツにスチーマーを当て、しわを伸ばしきれいにする」とした。集中力が持続できる作業時間にするため、前半は別の作業に取り組み、後半は自分のシャツを用意し、前回とは違うスチーマーも準備して、作業に集中できるようにした。新しいスチーマーにも興味を持ち、指導者が「使ってみる？」と言葉をかけると首を縦に振り即答した。

（エ）生徒の変容と課題

「できます会」では、Gのコミュニケーションの必要性や洗濯物を干す作業技術の向上など様々な課題を話し合った。コミュニケーションについては、授業内での機会設定が少ないため、十分なデータを取ることは難しかったが、ペアとなった生徒の行動をさりげなく見守る姿も見られた。また、洗濯のスキル面については、面と向かって指示をされるよりも、他生徒に発せられた指示をさりげなく聞いて自分のものにしていくので、独自の支援方法が有効

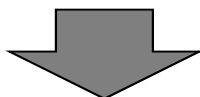
であることも確認できた。

今後の課題は、長期目標の「家事ができるようになる」に繋げていくために、洗濯などの家事の技術の向上を図りながら、家庭へ情報伝達し、Gが家事をする環境を作って生活の中で活かせるようにしたい。

できますシート②

平成29年9月25日版

だれが G(1-3)	
本時の行動目標：シャツのアイロン掛けで見本通りにしわを伸ばす 短期目標：炊事や調理、洗濯などに興味を持ち、自分から取り組む	
いつ 9月25日(月) 10時45分 ~ 11時45分	どこで 東棟2階 高等部1-4教室
だれと 高等部1年生 学年ユニット「洗濯」の生徒4名	
できる状況づくり <ul style="list-style-type: none">・繰り返し学習してきた洗濯活動の中のシャツのアイロン掛けに取り組み、指導者の指示を聞き、活動内容の見通しをつける・アイロン掛けが上手な生徒と同じ活動をする・簡単なハンカチからはじめる・異形のアイロンやアイロン台を準備し、選択する・アイロン掛けの完成例など数種類を見本提示しておく	支援 <ul style="list-style-type: none">・様々なペースの生徒と一緒に活動し、本生徒が主体となって動くようにする・できるだけ言葉かけは少なくし、様子を見て必要なら「こうするとシワが伸びるよ」等と言葉がけする

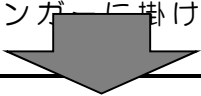


こんなことができた(手だて付きで記入) <ul style="list-style-type: none">・必要最低限の説明で自らの意思を持って順序通りに作業ができた・他生徒へのアドバイスを聞き、自分へのアドバイスにし、技術向上が図れた・待ち時間に、提示見本を見て大まかなイメージが持てた
--

「できる」を拓げるためのアイデア

こんなシチュエーションなら…，こんな手だてなら…，こんな時だったら…，こんな教材なら…，など

- ・導入時や作業中に，アイロンがけのスキルを高める説明や言葉かけをより丁寧にすることで，上手にできることの喜びを感じられるのでは？
- ・後半にスチーム機能を使って，ハンガーに掛けたまましわをとる方法に興味や意欲を持てた様子があった



【資料Ⅳ－１】高１できますシート

イ ２年生の取組

(ア) 生徒について

Hは中学校時代起こったトラブルが原因で母子分離しにくい状態となっており，本校入学時から現在まで保護者と一緒に車で登下校し，学校内でも母が近くにいる状態で活動を行なっている。学習中も不安になると母を呼び，間に入ってもらうことで活動に参加したり指導者や友達とコミュニケーションを取ったりしている。しかし，入学時に比べると慣れた指導者や友達と一緒に活動したり，会話をしたりする場面が増え，母が少し離れた場所においても落ち着いて過ごせる時間も増えてきている。特に，クラスの中では母と一緒にやっていた荷物整理を自分でやるようになったり，母がやっていた歯磨きの支援が担任に変わったりと変容も見られる。

(イ) 目標の設定と授業内容

Hの短期目標は，「キーパーソンとなる大人と一緒に少人数の友達と協力して活動する」である。そこで，卒業後の生活も見据えて，本人が母親と少しずつ離れ，慣れた指導者を介して少人数の友達と一緒に活動できる力を育む必要があると感じた。生徒同士で「コミュニケーション」をとりながら活動することをねらいとしたユニットを編成し，ユニット指導者を担任にすることで，クラス以外の小集団であっても周りの友達と協力して学習に参加できることを目指した。そして「できます会」を１～２ヶ月に１回行い，授業日の放課後に授業のふり返りや今後の展開を話し合うようにした。

(ウ) 授業改善と検証方法

最初の取組として，同じグループの友達からの誘いかけに応える回数や，友達に働きかける回数をカウントすることで，どのような状況であれば友達とかかわりながら活動しやすいのかを考察することにした。授業内容は，学

校内から受けた依頼に沿って物を作ることを主とし、ペアで活動する場面や、物の受け渡しをする場面を設定することで、友達とのかかわりを増やすようにした。また、友達からHに誘いかけるような取組をして、Hの反応を見守るようにした。

しかし、ペアリングや学習内容を変えてもHが誘いかけに応じたり、友達に働きかけたりする回数が増えなかった。また、過度な誘いかけはHにとって強い刺激となり、気持ちが不安定になってしまうこともあり、学習中に友達がHに誘いかける場面を増やすこともできなかった。

10月のできます授業をビデオ撮影し、Hの行動分析をしてみると、本人が母を呼ぶ回数が多いことが改めて分かった。そこでHが母を呼んだ場面を「先行条件」「本人の行動」「結果」の3点でまとめてみると、母を呼ぶのは活動の切替え時が圧倒的に多く、他には負荷の高い活動時やふいに友達から話しかけられた時などであった。そこで、Hが母を呼んだ時にはどんな理由があるのかを考えた。

○不安の低減：活動の切替え時や、道具の準備・片付け時に母を呼ぶことが多く、何をすればいいのかを母に確認することで次の活動に移る。教室内に慣れない人がいても不安になる。

○活動の軽減：はさみで切りにくい、のりや絵の具が手につく等、本人にとって負荷のかかる活動や苦手な活動時に母を呼んで手伝ってもらっている。

○母とのかかわり：母が離れそうな時や、褒めてもらいたい時に母を呼ぶ。データを取っていくことで、上記のような原因が読み取れた。

(※【資料Ⅳ－2】参照)

(エ) 生徒の変容と課題

11月以降は、Hが母を呼ぶ場面に着目して、その回数を減らすことができれば、指導者や友達と関わりながら学習する時間が増えると考えて、ビデオ撮影をしながらできます授業を行なった。しかし、家庭の都合で欠席する日が増えたこともあり、参加しても久しぶりの登校で母を呼ぶ頻度が高くなった。そのため、11月以降のこの授業での友達とのかかわりや母を呼ぶ回数については大きな変容がみられなかった。

卒業後の生活を見据えて、Hが母から離れて他のキーパーソンと一緒に活動できることが必要となる。そのため、今回保護者を呼ぶきっかけについて引続き考察しながら、保護者と協力して取組を続けていく。1月下旬からは、

母が別室で過ごし，その姿が見えなくても本人が落ち着いて過ごせている時間（給食時）を作れている。今後も，外部専門家の意見を参考にしつつ，状況づくりや支援方法についても工夫をしていきたい。クラス内での活動については，自分のことを自分でしたり，指導者やクラスメイトとのかかわりも増えていたりしていることから，クラスでの取組をもとにしながら，他の学習場面でも同じように支援していくことで，Hの自立を促していきたい。

平成29年10月31日

時間	項目	「お母さん」と呼ぶ行動	推測する理由
0分	入室		
1分	参観者を確認	「お母さん、手伝って」	a
1分	母退室	母を振り返りながら「お母さん」	a
1分	鞆をロッカーに入れる	強めの口調で「お母さん、手伝って」	b
3分	創作見本を提示される	廊下に顔を向けて「お母さん」	a
4分	道具の準備	「お母さん、こっちきて」	c
5分	絵の具の色選び	「かーさん。お母さん、手伝って」「早く手伝って」	a
14分	色塗が終了	「お母さん、お母さん、手伝って。早く」	c
16分	色塗の紙を追加	「お母さん、OK？」	a
18分	筆と器の片付け	「お母さん、洗いに行きたい。僕、洗いに行きたい」	b
21分	段ボール切り作業	「お母さん、手伝って」と数回	b
23分	母退室	「お母さん、待って、おいていかないで」	c
23分	段ボール切り作業	「お母さん見て、手伝って」	b
31分	道具の片付け	「お母さん、先生が何か言ってる」	a
33分	作品のお届け	「お母さん、手伝って。こっち来て」	a
36分	授業終了		

※時間は本人が授業に参加した時間

※推測する理由

a：不安の低減

b：活動の軽減

c：母とのかかわり

【資料Ⅳ－２】母を呼ぶときのデータ

できますシート②

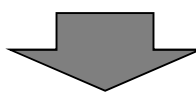
平成29年10月31日版

だれが H	
●短期目標：キーパーソンとなる大人と一緒に少人数の友達と協力して活動する 行動目標：文字スケジュールに記されている自分のやるべきことをキーパーソンとなる大人と行う	
いつ 10月31日（火）10：45～11：50	どこで 北棟2階 高2-6教室
だれと 同ユニット生徒4名 指導者1名	
できる状況づくり	支援
<ul style="list-style-type: none">・明確な文字スケジュールを机上に提示しておき、一緒に活動する人も記す・活動の回数を明確にしておく・キーパーソンとなる大人がどこにいるのか明確にしておく・本人が落ち着きづらい時には、タイムタイマーをセットしておく・片付け時には、本人の机上に片付けかごを置き、他の生徒が片付けに来られるようにする	<ul style="list-style-type: none">・教室に到着後、文字スケジュールを指差し、見るように促す・個別の言葉かけを増やすと刺激となるため、なるべく不要な言葉かけは減らす・物を受け取る場面では、「ありがとう」と小さな声でシャドーイングをする・同じ作業のうち、一回目は一緒に作業をして手順を見せ、2回目以降は徐々にフェードアウトしていく



こんなことができた（手だて付きで記入）

- ・授業時間36分のうち（本人参加時間）、約12分間は指導者の指示をもとに一人で（もしくは友達と）自分の席で活動することができた
- ・絵の具で4枚の画用紙に3工程で着色する際、1枚目は指導者と手順（薄い青→濃い青→紫）を確認しながら作業をすることで、残りの3枚は自ら着色できた
- ・予定が文字スケジュールで提示されていることで、見通しが立ち、予定になかったこと（絵の具皿を洗う、新聞紙の上に着色した画用紙を置くなど）にも取り組んだ
- ・段ボールを切る際に、友達が机を合わせると、それを受け入れ、すぐそばで作業することができた。また、友達の言葉かけに「うん」と返事することができた



「できる」を拡げるためのアイデア

こんなシチュエーションなら…，こんな手だてなら…，こんな時だったら…，こんな教材なら…，など

- ・スケジュールの提示方法を統一すれば、他の学習集団の中でも落ち着いて活動できるのではないか
- ・友達とのコミュニケーション場면을即時評価していけば、友達と活動しようとする場面が増えるのではないか
- ・保護者を呼んでいる時の前後を観察すれば、保護者を呼ぶ機能がどんな機能か分かるのではないか
- ・文字スケジュールに役割を担う内容を書いておけば、役割を担えるのではないか

【資料Ⅳ－３】高２できますシート

ウ ３年生の取組

（ア） 生徒について

生徒Ⅰは更衣・食事・排泄など基本的な生活身辺自立はできている。挨拶など自分の言葉でコミュニケーションを取ろうとするが、発音が不明瞭で自分の思いを指導者や友だちに伝えることが難しい。日常の関わりについては発声やジェスチャーで伝えようとすることが多い。慣れた場面や人に対しては笑顔で自らかかわろうとすることがあるが、初対面の人や初めての場面、自信のない活動では周りの様子を伺って、声や動作が小さくなり消極的になることが多い。高等部入学後は、タブレット端末のアプリを利用したコミュニケーションに取り組んできた。３年間の取組の中でタブレット端末を使って答えるように促されると、イラストや写真の選択肢（４つ）の中から選んで自分の思いを伝えたり、活動内容を報告したりできることができるようになってきた。双方向のやりとりができる姿を目指して、自分からタブレット端末を用意・使用できるように取組を進めてきた。

（イ） 目標の設定と学習内容

今年度の指導場面については、自分から友だちの様子を見て判断したり、安心してコミュニケーションを取ったりすることができるように、クラススタディを活動場面として選択した。繰り返し行うことで活動に見通しを持ち、自主的に行動できる場面が増えるように「掃除」を学習内容として設定した。慣れ親しんだ指導者や友だちと教室掃除を行う中で、「必要な時にタブレット端末を自ら用意し、使用する」という目標に取り組むこととした。使用する場面がわかりやすいように、自分の担当する役割が終わった時に「できま

した。」という報告の場面と、振り返り時に「〇〇・がんばりました。」と報告する場面で、タブレット端末を使って発表する機会を設定した。

（ウ） 授業改善と検証方法

I がタブレット端末を使って自ら発信する活動に取り組むため、週2回程度クラススタディの時間に掃除を行うこととした。さらに、定期的に手だてや状況づくりについて検討する場（できます会）を設定した。取組当初は自分の役割や協力するペアの友だちがわからず、指導者や友だちの言葉かけを受けてから行動する場面が多く見られ、タブレット端末の活用場面も少なかった。見通しを持ち自ら活動に参加できるように、授業の始めに黒板を使って役割と顔写真をマッチングさせたり、首からかける役割カードを使用したりして役割意識が持てるようにした。指導者の言葉かけが無くても自分で準備・片付けができるように、掃除道具やタブレット端末などを置く場所を決まった位置に固定した。また、掃除する範囲や方向が視覚的にわかるように床にテープを貼り目印とした。さらに、ゴミ捨てる場面では、肢体不自由の生徒とペアを組んだ。

生徒の行動の変容を記録するため、授業をビデオ撮影して生徒Iの行動が何をきっかけに生起しているのか検証した。生徒Iの行動が指導者の言葉かけ・モデル、友だちの言葉かけ・モデル、自発的行動など、行動のきっかけとなる先行条件は何であることを分析し、必要な支援やできる状況づくりの工夫の参考とした。またタブレット端末のアプリのログ機能を活用し、コミュニケーションに使用したボタンの種類や回数についてもデータを収集し、生徒Iの使いやすいボタン数や配置の参考とした。（※【資料Ⅳ－4】参照）

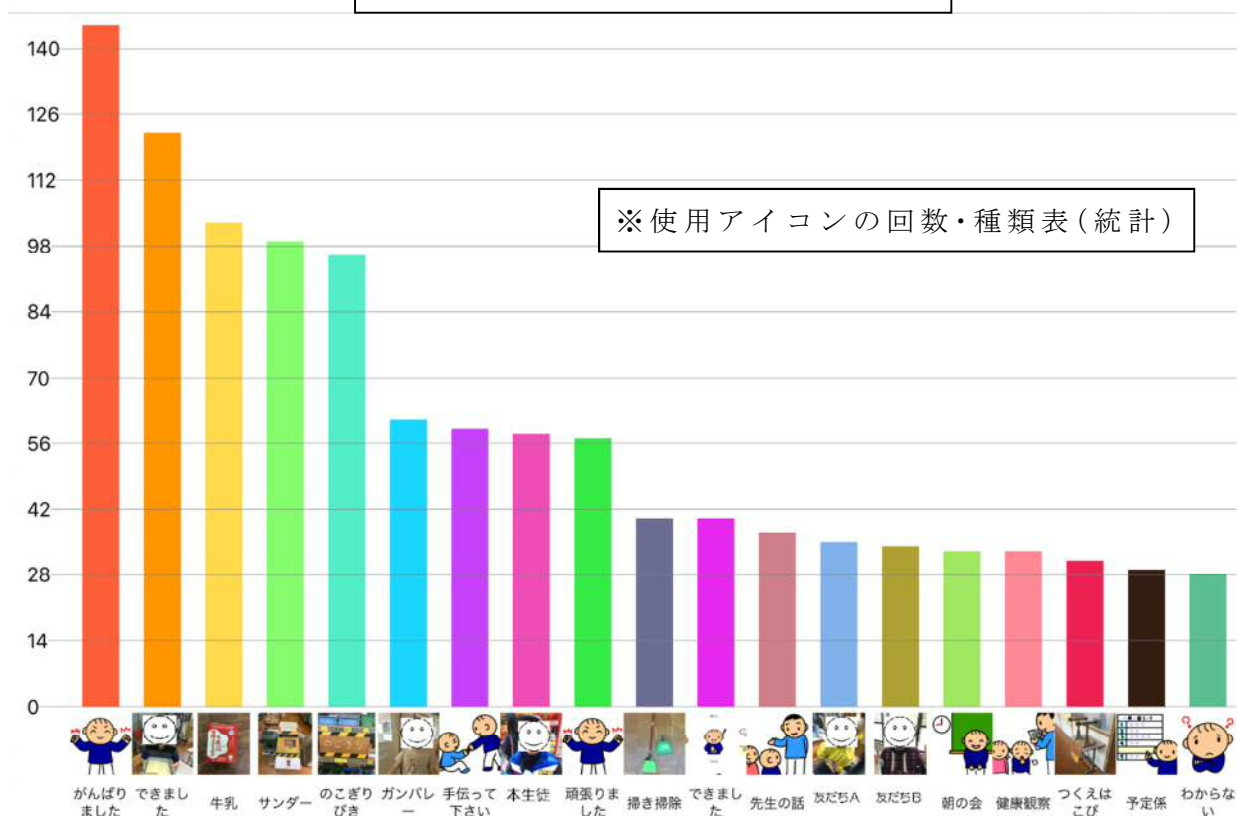
（エ） 生徒の変容と課題

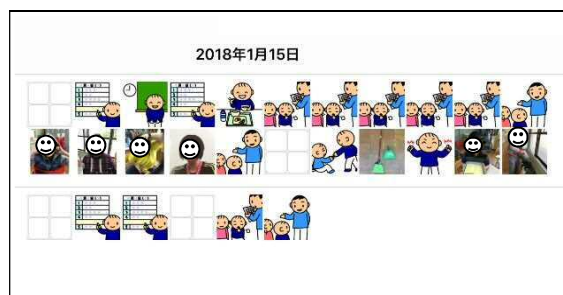
授業当初は指導者の言葉かけをきっかけに行動することが多く、周囲の様子をキョロキョロと見ている時間が長かった。授業回数を重ねるにつれ友だちの様子を見て判断して行動したり、自信を持っている場面については自分から準備・片付けしたりする場面が増えてきている。また、ゴミ捨てる場面では自分から友だちをゴミ捨てるに誘い、一緒に捨てるに行くこともできた。タブレット端末の使用については、役割を終えた時の報告では掃除が終わるとタブレット端末を準備し、自分でアプリを起動し報告のボタンが入っているフォルダを開くことができる。最初はフォルダ内の報告ボタンは「できました。」の一つだけであったが、現在では仕事内容（「ほうき」「ゴミ捨てる」

など)も含めたフォルダ内のボタンから選択して伝えることができつつある。振り返りの場面では、指導者や友だちの反応を見ながら「〇〇・がんばりました。」などの報告ができてきた。新しいアイコンを使用する際は、アイコンの意味が理解できず指導者の様子を確認しながら押す様子が見られたが、繰り返し使うことでアイコンの意味を理解できてきた。それに伴って使えるアイコンの数や授業が増えてきている。

学校生活全般を通して、安心できる相手とタブレット端末を使ってのコミュニケーションを積み重ねることで、自分の思いが伝わることを経験し、自分からタブレット端末を準備し積極的にやりとりしようとする姿が見られる。卒業後の生活ではタブレット端末を使ってコミュニケーションを取る人や場面が増えていくように、継続して取り組んでいきたい。そのためには、家庭はもちろん卒業後の進路先や余暇の利用先にもタブレット端末の有用性やアプリの使用方法を引き継いでいくことが重要である。

使用ボタンの拡がり・頻度の変容





※取組当初の使用回数・種別（１日）

※現在の使用回数・種別（１日）

【資料Ⅳ－４】アイコンの使用ボタンのデータ

できますシート		平成30年 1月 15日版	
だれが	生徒1	目標：必要な時にタブレット端末を自ら用意し，使用する	
いつ	1月15日（月）9時40分～10時30分	どこで	南棟2階 3－4教室
だれと	指導者1名 生徒4名		
できる状況づくり		支援	
<ul style="list-style-type: none"> ・見通しを持って活動できるように，スケジュールを黒板に提示しておく ・掃除の役割がわかるように，役割の写真と顔写真を掲示しておく ・タブレット端末で場面に応じた気持ち伝えられるようにアプリ内のアイコンを設定しておく <p>※生徒の実態に応じて，アイコン数や配置を調整する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動開始や終了の号令役ができるように，タブレット端末内に「掃除開始」「掃除終了」のアイコンを設定しておく ・自分からタブレット端末を準備できるように，掃除中は決まった場所（カゴの中）にタブレット端末を置いておく 		<ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて，指導者が写真や実物を示して役割意識が持てるようにする ・最初は場面に応じて「できました」「手伝ってください」のアイコンを指導者と一緒に押して，イラストや写真が意味することを理解できるようにする ・初めて号令係を担う際は，指導者がタブレット端末の操作の見本を示す ・最初に指導者と一保管場所を確認し，2回目以降は見守る。出し忘れている時はカゴを指さし準備することを促す 	



<p><u>こんなことができた（手だて付きで記入）</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・掃除の取組を始めた当初に比べると，自らタブレット端末を使って伝えようとしている場面が増えた ・指導者の言葉かけで，タブレット端末内の適切なアイコンを押して号令ができた ・活動を繰り返すことで見通しを持ち，大まかな掃除の手順を理解して掃除できた ・活動を繰り返し自信がついたことで，3つの活動（新聞紙ちぎり，箒・ちりとり，ゴミ捨て）が終わったら，自らタブレット端末を準備して指導者の元に向かうことができた ・指導者の言葉かけを受けて「活動内容」「できました。」のアイコンを押すことができた
--

- ・活動の振返りで、自らタブレット端末を準備し、アプリを開くことができた

「できる」を拡げるためのアイデア

こんなシチュエーション，手だてなら…，こんな時だったら…，こんな教材なら…，など

- ・写真やイラストと実物のマッチングはしているが、コミュニケーションにおいて写真やイラストのアイコンがどういう意味を持っているのかを理解し自ら使用できるまでには、学習の中で繰り返しやりとりの経験を積み重ねる必要があるのではないか
- ・自分で動けるようにできるようにするために、何をきっかけに判断し行動しているのかを記録を取って分析していく→ABC分析など。
- ・肩から下げるタイプのカバーを使用することで、持ち運ぶ場面が増えるのではないかな
- ・操作の簡単なカメラアプリを使用し、学習の様子や休日の様子の写真を撮って、指導者や友達や保護者に見せて伝えるといった形のコミュニケーションも家庭と連携してすすめていけたら、活用の幅が広がる

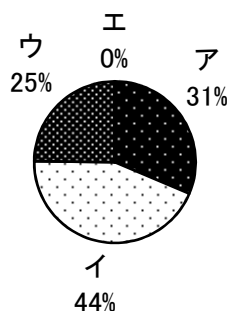
【資料Ⅳ－５】高３できますシート

（２） 「学校」という場を超える取組

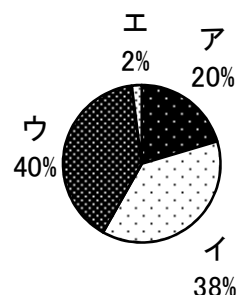
高等部では、キャリアアップ支援コーディネータが主に実習担当を担うことになり、１年生の間から、地域の資源を活用しながらの産業現場等実習を行なってきた。これらの実習では、事前学習・事後学習も行い、生徒自身に実習の意味合いや自分の目標を確認させ、実習後の課題をフィードバックして、次の実習に繋げることに取り組んできた。このように、在学中から産業現場等実習を行い、その課題に取り組みながら授業改善を図り、そこで得られた支援情報を移行先に伝えることで、より有効な手立てとなると考えている。

実習の記録は、実習が終わるごとにかかわる指導者（学年・ワークチーフ）に回覧し、共通理解できるようにしてきた。今年度は、その記録（実習の評価と課題）をかかわる教員が共通理解できるようにパソコン上の所定の場所に保存していつでも閲覧できるようにしておき、さらに月に一度のワーク担当者会でもそれを話題に挙げて、ワークスタディの中でもフィードバックしていけるようにと考えた。その結果、どのような取組ができたのかは、全員にアンケートを取って確認した。

【実習後の課題を共通理解することで
生徒の課題を意識することができた】



【実習後の課題を共通理解することで
生徒の課題に沿った取組ができた】



【資料Ⅳ－６】アンケート結果

このように、実習の課題を共通理解することで、そのことを意識することができたと考える指導者は、7割以上であった。それに比べ、実習の課題に沿った取組ができたと考える指導者は6割弱にとどまった。

取組ができた事例としては、「実習の課題を知ること、クラスやユニット、授業以外の日常場面でも取り組むことができた」、「ワークスタディで課題を相談し、取り組めた」、「実習の課題ということで、卒業後に向けた生徒の意識づけができた」などの意見が多くあがった。言葉遣いや挨拶、身だしなみなど、社会的マナーに繋がることは取り組みやすかったようである。反対に、取組ができなかった事例としては、「指導者間で実習の課題が共通理解できていない」、「年度途中から新たにユニットで取り組むことが難しい上に、取組に向けての話し合いがされなかった」、「短期目標に取り組む以外に余裕がない」などの意見が出ていた。

取組を進めるための改善案としては、「指導者にも生徒自身にも、課題をより分かりやすく提示していくこと」、「何らかのシートを作成し、課題と取り組むべきことを明確にしていく」、「ユニットや学年会で話し合う機会を必ず持つ」、また、「実習の様子を担当やワーク担当が見る機会を持つ」など、実際にすぐに取り組めそうな具体案も数多くあがっていた。指導者の、生徒の課題に向かおうとする意識と、アイデアを出していこうという意欲が見られる結果であった。

今年度の取組は、今までと比較すると、生徒の実習課題を可視化することによって、指導者が取組を行いやすかったと考えるが、まだまだ指導者同士の連携や丁寧な取り組み方に課題がある。来年度は、また一歩進めた取組ができるようになればと考える。

(3) 「学校種」を超える取組

今年度、「学校種」を超える取組として、生徒の居住地の中学校を対象に、交流を考えることにした。まず、相手校選びとして、公共交通機関で行き来できる西京区内の学校とし、本校とかかわりのあるd中学に交流を打診した。相手校も、取組を理解し、快諾がもらえた。交流の内容は、「中学校を訪問し、先輩として西総合のことを紹介する」こととし、以下の要項で実施した。

日 時 12月15日(金) 9:00～10:00

場 所 d中学

目 的 ・学校間交流を通して、互いの理解を図る
・生徒が地域の中学校を訪問し、地域との繋がりを持つ
・中学生に、西総合支援学校のことをよりよく知ってもらう機会を持つことで、卒業後の生活に見通しを持てるようにする

参加者 西総合1～3年生5名、d中学(育成学級)1～3年生10名

日 程 9:00 ①現地(d中学)集合

②自己紹介

③西総合の説明(パワーポイントを使って)

④質疑応答

⑤一緒にダンス

10:00 終了し、西総合に公共交通機関で戻る

11:30 ⑥振り返りアンケートを記入、発表

11:50 学習終了

①現地(d中学)集合

「なつかしいな。」という言葉が多く聞かれ、卒業後久しぶりに訪れた学校に、期待と緊張の様子が見られた。

②自己紹介

本校の生徒5名が順番に学年と名前を自己紹介。この時点では、まだまだ

緊張が強かった。

③西総合の説明（パワーポイントを使って）

西総合の一日の様子，学習の様子，一年の行事，などを画像で紹介。説明文を，生徒が交代で読んで紹介した。説明文は，事前学習で指導し，その後，数日各自で本番に備えて練習をしていた。その成果が発揮できた。

④質疑応答

事前に，質問アンケートをd中学で取ってもらい，受け取っていた。質問は非常にたくさんあり，中学生の関心の深さが伺えた。説明のパワーポイントの中にも質問の答えは入っていたが，それ以外のことは，その場で生徒が答えた。一生懸命に答える生徒の姿が見られた。

⑤一緒にダンス

本校の体育の部で団体演技として踊ったダンスのモデルビデオを，初めに1回映像で見て，その後，一緒に踊った。それまで発語の無かった中学生も，ダンスは楽しそうに参加する姿が見られた。本校生徒も，ダンスでは緊張もほぐれ，楽しそうに踊る姿が見られた。

⑥本校生徒の振り返りアンケート結果

●中学生にとって良かったことはなんですか？

- ・楽しくダンスできたこと
- ・先輩が発表している所を見て，中学生が喜んでいた
- ・西総合のことをだいたいわかってもらえた

自分たちにとって良かったことはなんですか？

- ・みんなにふれあえたことが良かった
- ・中学生に分かりやすく読めたこと，質問に答えることができて良かった
- ・やさしい心が持てた
- ・中学生に分かりやすい言葉が言えて良かった

●生徒の感想

- ・とても楽しかった。また来年も交流したい。
- ・中学生としゃべれて良かったです。
- ・ダンスして楽しかったです。
- ・ダンスしてカッコよく踊れた，質問に答えることができて良かった。
- ・司会で話す量はちょうど良かった。

・できるなら来年は歌をうたいたい。

○中学校より後日聞き取った生徒の感想・様子

生徒たちは、小学校から知っているメンバーなので、「カッコよくなってきたな。」「すごいな。」「さすが高等部の先輩やな。」と感激していた。また、3年生生徒から進路に繋がる実習先や作業内容を聞いて、高等部卒業後の進路展望が持てた様子であった。今までの3年生対象の西総合で行われる学校説明会だけでは、生徒自身は内容がよくわからなかったのが現状かと思われる。今回の交流で、生徒たちの西総合への理解が深まったと考えられる。

このように、初めての交流は、本校の生徒たちにとって大きな経験となり、自分への自信に繋がったと考える。本校に戻った時に、友達に「中学校に行ってきた。」と力強く報告していた姿からも、そのことが伺える。また、中学生にとっても、大人向けではない自分たちへの学校紹介であったため分かりやすく、知っている先輩が説明したことで、自分たちの将来の姿をイメージしやすかったと考えられる。互いに得るものが大きい取組であった。

学校で、学年で、クラスで「できる」ことを持ち寄って、学校種を超えた場で力が発揮できたことは、本校の願う交流学习の最も理想的な姿かもしれない。場所が自分の地域や出身の中学校であることで、安心して臨むことができ、さらに、先輩としていいところを見せたいという思いは、社会性の獲得にも繋がっていくと考えられる。今年度は、初めての試みということもあり、一校との交流に留まったが、今後、少しずつ交流校を増やしていくことで、多くの生徒に交流学习の機会があればと考える。

3 成果と課題

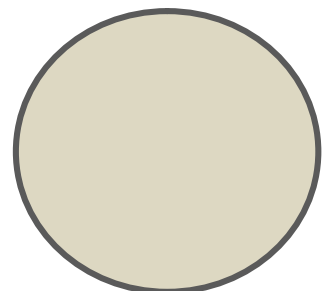
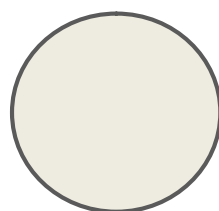
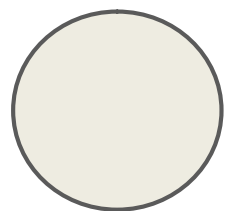
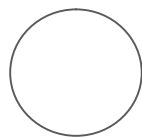
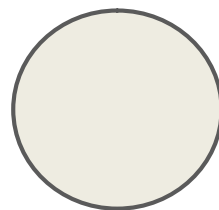
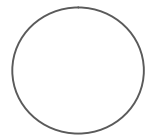
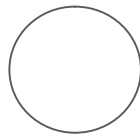
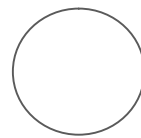
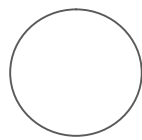
今年度も、「できます授業」を通しての授業づくり・支援と手だてのあり方の検討を、各学年で研究協議を重ねながら行なってきた。今年度は特に、授業のつくり方や、生徒の目標についてなど、基本的なところを協議することが多かった。生徒の目標は、本当に卒業後に繋がるのか。学校で培った「できる」は、どのように卒業後の生活に活かされるのか。それを授業で取り組んでいくためには、生徒一人一人の今の生活を知り、卒業後の生活を知らなければならない。高等部段階では、卒業後の生活を知ることは大切な専門性にもなると考える。今後も、高等部としての大切な視点を欠かすことなく、

取組を進めていきたい。

三つの場を超えた取組については、今年度は「学校」を超えた取組である産業現場等実習について、もう一步進めたいと願い、生徒の実習の課題を学部で共有することと、それをワーク担当者会で話題にすることを積み重ねた。その結果、今までよりは生徒の課題を意識できたようであったが、もっとこうした方がいいというアイデアもたくさん出た。このことは、今後の取組に繋げていけると考える。

さらに、「学校種」を超えた取組については、初めて中学校の育成学級との学校間の交流を試みた。その結果は、両校にとって双方向のプラスがあり、非常に実りのあるものとなった。今年度は一校のみとの取組であったが、今後、交流校を増やしていければと考える。

V 支援部の取組



V 支援部の取組

1 研究テーマ

「専門性を活かし、子ども一人ひとりの『できる』につなげる校内支援と地域支援のさらなる充実～校内での連携や地域との連携～」

(1) 支援部について

支援部では、子どもたちや指導者の困りをもとに、校内では、各学部に対する支援を行なっている。地域支援としては、「育（はぐくみ）支援センター」（京都市総合育成支援教育相談センター）として、本校校区に居住する子どもの発達についての様々な悩みを持っている保護者や教育・福祉関係の方々を対象に、子どもの就学や支援方法等の相談にあたっている。

(2) テーマ設定について

ア 校内支援

校内支援を実施するために必要なことは、各学部の児童生徒の様子や実態を知ることであると考えている。従前通り、各学部からの要請をもとに、児童生徒の学習に対する困りを集約し、支援部で体制を組み、支援にあたっている。また、可能な日や時間には、校内での授業観察をすることや児童生徒とのかかわりを持つことの機会を多くとるようにしている。各学部の担当を決め、系統立てた校内巡回を心がけるようにしてはいるが、万遍なく巡回するには、時間がかかっているという現状があるので、ニーズに応じて優先度を考慮しながら、児童生徒の実態が把握できるようにしていきたい。

これまでは、年度当初の支援ということで、新入生・転入生に対する支援依頼を中心とした校内支援依頼票 A（年度当初 4 月～5 月程度）の提出を各学部依頼していた。続いて、その支援に対して継続を依頼する場合や喫緊ではない依頼について、校内支援依頼票 B（年間を通しての支援）の提出を依頼していた。しかし、2 種類の似たような校内支援依頼票が存在することや校内支援依頼票 A（年度当初 4 月～5 月程度）を提出したのち、続けての支援を希望する場合には、校内支援依頼票 B（年間を通しての支援）を提出しなければならないことなど、分かりにくく煩雑になる部分があった。

そこで、今年度については、2種類の校内支援依頼票を廃止し、通年受け付けるという形の校内支援依頼票のみにした。例年、喫緊の実態把握が依頼される新入生・転入生については、全ての児童生徒について様子を見に行くという形にした。その際、身体学習など、すぐに学部が必要とする内容については、各学部にその児童生徒の名簿の提出を依頼した。このように、提出書類の削減をすると、児童生徒のニーズに応じた支援に影響があるのか、また、こういった変容があるのか検証したい。これまで通り、支援部への依頼については、学年主任や学部長を通じて行い、常に情報の共有ができるようにする。これらのことで、各学部や支援部との連携を深めていくことができると思う。

イ 地域支援

地域支援では、学習や学校生活等に困りを感じている本校校区居住の子どもたちについての相談や支援、本校児童生徒の放課後活動の充実、校区内での研修会、障害について理解を求める啓発活動などに取り組んでいる。今年度は、昨年度に引き続き、単発的になりがちな巡回相談や教育相談ではなく、各校と連絡を取り合い、連携を深めていく中で、継続性に目を向けた支援に取り組む。関係者と連携し、継続性に目を向けた支援に取り組むことで、学年をまたいだ支援の継続や、就学前施設等から小学校、小学校から中学校などの学校種を超えた支援につなげていきたい。

校内や地域の学校園では、より高い専門性に対する要求が出てくることがある。そこで、京都市地域リハビリテーション推進センターの作業療法士（OT）、理学療法士（PT）と連携をとり、校内の児童生徒や本校校区の小中学校で助言を受けることを続けている。また、本校勤務の言語聴覚士（ST）が、校内はもとより、必要に応じて、本校校区の小学校児童に対しての助言を行なっている。外部専門家の助言を受けながら、指導者が学び、指導者自身の専門性を高めていくことにつなげたい。

校内での連携や地域の学校園等との連携を深めていきながら、これらの取組を進めていくことで、居住地域が、本校の児童生徒に限らず地域の子どもたちにとって暮らしやすい場となるように、地域への拡がりという点も充実させていきたい。

これらのことに取り組んでいくことで、支援部の専門性を活かした、子どもたち一人一人の『できる』につなげる支援のさらなる充実に努めていきたい。

	重点目標	具体的方策
校内支援の充実	指導部，総務部との連携のもとに充実した校内支援を行い，子どもたちが楽しく学べる学校を目指す	①校内での学部への入り方（給食，昼休みなど）の検討をし，支援部が学部の実態を直接的に知る機会を多く持てるようにする ②各学部窓口担当の設定をして，より密な連携が行えるようにする
	特別非常勤講師や外部専門家を効果的に活用できるよう各学部と連携し，子どもたち一人一人の継続的キャリアアップを支援する	①それぞれの必要に迫った校内支援が充実できるように，指導者の「困り」や児童生徒の「困り」を直接聞き取る ②聞き取った「困り」をもとに，必要に応じて受けた専門家の助言を，指導者や支援部内で共有していく。そして，その助言や経過を継続して伝えていく
	校内支援を通して，教職員の専門性向上を図り，個別の包括支援プランをもとにした実践へ活かす	①学部から得た各学部の支援・手だてを，学部の観察をしていく中で，他学部でも活用できるように支援部内で情報の共有をしておく ②校内支援については，情報の伝達経路を明確にしておき，各学部と支援部の中で情報が共有できている状態にしておく
地域支援の充実	障害のある子ども，保護者，教職員の継続的キャリアアップを支援する取組みを「育」支援センターが推進する	①地域の学校園からの要請に応じて，専門的分野の活用による支援を継続し，指導者の専門性を高めることに繋ぐ ②支援の継続性に注目し，教育相談や巡回相談の事後，児童生徒の様子や学校園の体制にどのような変貌があったか，聞き取る機会を持つ
	障害のある子どもが地域の中で安心して生活できるように，地域，学校，福祉等の関係機関と連携し，専門職の活用も視野に入れた新たな「地域」の創造をめざす	①地域の学校園に「育」の事業内容を伝える ②学部と連携をして，本校児童生徒の居住地校を把握し，地域支援に活かす ③これまでの研修や研究の成果を学校種を超えた地域支援への取組にフィードバックできるようにする

【資料Ⅴ－１】 今年度の具体的な計画

2 今年度の取組

(1) 校内支援

ア 通信機器を使用した支援

訪問学級在籍児童とその学年との児童で、2～3か月に1回、タブレット端末を使用して、自宅と学校を繋ぎ、交流をはかっている。この児童については、入学時から年に数回程度、タブレット端末での通信をして、児童と児童とのやりとりを続けてきた。また、通信を通して、学部集会への参加もした。音声のみの情報や静止画像だけでなく、リアルタイムでテレビ画面に映し出される映像は、児童の興味を引き、自宅にいながらにして、相互のやりとりを行なう交流の時間となった。

今年度、入学後、初めてのスクーリングを行なったとき、実際に児童たちが初めて対面することになった。これまで、画面を通じてやりとりをしていたことで、よそよそしさはあまり見られず、みんなで囲むように和気藹々とした活動を行うことができた。

このほかにも、ICT活用の専門家と連携を取りながら、学校間交流として中学校と本校との生徒会でタブレット端末を利用したやりとりをした。通信方法などの課題は残るが、出向くことなくリアルタイムでやりとりができることで、効果的な活動ができている。

イ 校内支援依頼票による支援

今年度から、新入生・転入生に対する年度当初の支援依頼については、校内支援依頼票の提出を無くし、全ての児童生徒の様子を観察し、必要に応じて支援を行うことにした。

これまでは、校内支援依頼票 A（年度当初4月～5月程度）の提出はあるが、校内支援依頼票 B（年間を通しての支援）の提出がない場合、継続する必要があるのか無いのかを尋ねていた。また、5月ころをひとつの区切りとして、年度当初の支援として続けて行い、以降については通年の支援という形に移行していた。

校内支援依頼票を一本化することで、この区切りはなくなり、指導者と直接話しながら行うことで、数回の支援を経て、一旦、終了する場合など、期間についてフレキシブルに対応ができるようになった。期限を設定しないことは、その児童生徒に応じた支援をすることに繋がった。

また、新年度が始まってすぐに提出が必要になる昨年度までの校内支援依頼票 A（年度当初4月～5月程度）では、やはり十分に児童生徒の実態把握ができないまま

での提出であった。今年度は、各学部の名簿一覧の提出を依頼することでそれに代え、事務的な手続きの削減にも繋がった。今年度の支援依頼票は、随時提出可能ということがわかりやすかったようで、各学部から随時支援依頼を受けている状態である。

支援部では、各部担当を決め、校内観察をする中で、支援が必要でありそうなところについてピックアップをした。また、新入生・転入生のクラスを優先的に観察するようにした。支援部内での情報交換を経て、また、学部からのニーズと併せ、支援のニーズの優先度を考慮しながら校内支援をしたことで、校内支援依頼票を一つにまとめても対応できたのではないかと考える。

校内支援依頼票			
平成 29 年度 月 日記入			
部	年	組	児童生徒氏名
担任(記入者)			担当者
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;">困っていることや相談したいこと</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">障害の様子（主たる障害名・重複する障害など必要な情報をご記入ください）</div>			
希望曜日・時間	毎週 曜日 / 毎日	～	
場所			
<div style="border: 1px solid black; display: flex; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px; margin-right: 5px;">提出手順</div> <div>担任(記入)→学年主任→(確認)→学部長(確認・集約)→支援部</div> </div>			
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">支援部記入欄</div> <div style="border: 1px solid black; height: 40px; margin-top: 5px;"></div>			

年度当初の校内支援予定の比較			
	平成 2 8 年度		平成 2 9 年度
	校内支援依頼票 A 年度当初～5 月程度	校内支援依頼票 B 年間を通しての支援	校内支援依頼票 随時提出可能
年度当初	校内支援依頼票 A の配布 身体学習／摂食指導／その他の指導		
学部で集約	各学部で集約 学年主任が確認し、学部長が集約して、支援部に提出する		各学部で集約 各学部で、緊急度の高い児童生徒を挙げてもらう
支援部で集約 ※平常授業 開始までに	支援部で集約 支援部会でどのような校内依頼票が提出されたか確認・共有し、年度当初の校内支援計画を作成する		支援部で周知 支援部会でどのような必要性があるかを確認
年度当初の 校内支援開始	校内支援依頼票 A による 校内支援を開始 並行して、支援部教員・S T が校内を巡回観察する		校内支援依頼票の配布 全校教職員にメールで配布する 以降、随時受け付けていく
4 月末頃	校内支援依頼票 A による 校内支援が校内支援依頼票 B による支援に移行することを伝える 通年版が始まるまでは、校内支援依頼票 A による継続する。校内支援依頼票 B へ移行を希望する場合は校内支援依頼票 B を提出する	校内支援依頼票 B の配布 校内支援依頼票 A を提出した場合でも、長期的に支援を依頼する場合、専門家活用などその他のことを希望する場合などは、校内支援依頼票 B を提出する	
個人懇談会後 5 月上旬頃		校内支援依頼票 B の提出を一旦締め切る	
学部で集約		校内支援依頼票 A と同様	
支援部で集約		校内支援依頼票 A と同様 外部 O T ・ P T については、年間の支援計画を作成する	

【資料 V - 3】 昨年度と今年度の年度当初の支援の比較

ウ 授業改善

先に述べたように支援のニーズを見ていくと、児童生徒の日常の学習の中で、支援部の専門性を活かした支援を行う機会があった。例えば、これまでの経験を活かし、子どもたちの学習への取り組み方を学部の指導者と一緒に考えたり、研究授業の参観や研究協議に参加し、専門性を活かした助言をしたりして、授業改善に繋がることがあった。また、今年度は、自閉スペクトラム症支援士が在勤し、構造化に関する支援依頼やP E C Sを使ったコミュニケーションなど、具体的な依頼があり、より専門性を活かした支援を行なうことができた。

エ スクールカウンセラー

今年度より、スクールカウンセラーの勤務が、昨年度の月1回から、1週間に1回になった。児童生徒への継続的なカウンセリングを行うことができた。時間的な余裕ができたことで、保護者に対してのカウンセリングの機会が昨年度より多くなった。また、放課後にあたる時間にも勤務していることで、本校指導者と直接話をして連携を取ることができ、その他にも、月に1回、各部長・養護教諭・担当副教頭が参加する情報交換会を実施し、連携を深めることができている。

(2) 地域支援

ア 継続性を念頭に置いた巡回相談

昨年度に引き続き、巡回相談の依頼があった学校園に対しては、1～数か月後に子どもたちの様子を尋ねることを続けている。幼稚園の年中にあたる学齢や小学校高学年については、その先の小学校や中学校についても、その場合の巡回相談について提案をし、働きかけている。

今年度、就学前の園から小学校に就学したケースがある。このケースでは、昨年度から、園と連携を取ったり小学校と連携を取ったりして、今年度に入ってから巡回相談を提案していた。今年度、進学してからの児童の様子としては、これまでの園での取組の成果や本人の成長もあり、小学校では困りを感じさせないような学校生活を送っているということであった。実際に授業観察をした場面でも、落ち着いた様子が見られた。そのときには、視覚的にわかりやすくすることが自分で判断して行動することに繋がっていく支援になることを提案したり、今後、学校生活で困りが出てきたときにすぐに対応できるように、小学校と「育」とで連携をして見守っていくことを確認したりした。

他に、来年度、中学校に進学する児童について、小学校で学ぼうちによりよく学習が進められるような支援の方法を確立して中学校に引き継ぐことができるように、複数回の巡回相談を実施したり学校サポートチーム会議をもったりしたケースがある。

また、肢体育成学級の児童生徒については、各学校の依頼に応じて、継続した支援を行なっている。肢体育成学級担任西ブロック連絡会の研究授業では、京都市地域リハビリテーション推進センターの作業療法士や理学療法士にも助言を受けている。

巡回相談のあと、1～数カ月後に子どもたちの様子を尋ねることは、その学校園での他のケースの相談に繋がったり、事後の様子を知ることで地域支援Ｃｏへのフィードバックになったりしている。

イ 地域への拡がり

地域で暮らす子どもたちが、安心して過ごせる放課後の活動の場として、児童館に対する支援の提案や研修を行なっている。

児童館については、困りを抱えた子どもの個に対する支援の提案だけではなく、児童館で過ごす子どもたちにとって、わかりやすいような情報の提示の仕方を提案したり、子どもたちへの対応の仕方の例を紹介したりしている。また、一般的なＬＤ等学習に困りを持った児童生徒に対しての支援の仕方についての研修依頼を受け、実施した。

昨年度は1館のみであったが、今年度に入ってから複数の児童館からの相談を受け、地域への拡がりを実感している。

ウ 専門性を活用した地域支援

(ア) 言語聴覚士による地域支援

a 公開学習会

昨年度に引き続き、総合育成支援教育公開研修会に加え、外部専門家活用事業公開学習会を年に数回開催している。自閉スペクトラム症支援士による公開研修会や言語聴覚士（ＳＴ）による外部専門家活用事業公開学習会では、本校校区の小学校を会場としてお借りし、地域の学校に啓発していくことを行なっている。

ＳＴによる公開学習会では、昨年度までと同様に行なっているタブレット端末の通信による支援の様子動画を映すことで、実際の支援の様子を掴んでもらうことができたようで、小学校からの支援依頼に繋がったケースもある。この公開学習会は、複数回実施し、少しずつ復習をしながら繰り返し学んでいくことにしている。このことで、地域の学校の指導者が続けて公開学習会に参加することに繋がっているようである。

b 通信による地域支援

タブレット端末の通信を利用したＳＴによる地域支援は，昨年度に引き続き，ＳＴの勤務時間に考慮しつつ行なっている。

まず，依頼があった場合，依頼校で動画を撮影してきてもらい，本校で教育相談という形で動画を見ながら助言を行なっている。ケースに応じて，助言を続ける場合，タブレット端末と通信機器を持った地域支援Ｃｏが依頼校に赴き，通信という形で，本校にいるＳＴとやりとりをして助言を行なっている。

リアルタイム，かつ，鮮明な画像での通信が要求されるので，Ｗｉｆｉによる通信が有効である。本校からタブレット端末を持ち込んで行なっている。これは，先方にタブレット端末がないこと等があるためである。先に述べたように，地域の学校園でのＳＴによる地域支援のニーズが増えてきつつあることから，今後，本校からタブレット端末を貸与して行なうのか，また，通信方法はどのようにしていくのか，整理していくべき課題がある。

（イ）弱視通級指導教室

京都市では，小学校の普通学級に在籍する弱視の児童が，障害に応じた特別な指導（自立活動）を受ける場として，「弱視通級指導教室」を設置している。弱視通級指導教室は，地域制総合支援学校４校から，担当指導者が児童在籍校へ巡回指導をしている。

今年度より，本校校区に弱視通級指導教室対象児童が入学した。担当指導者が１週間に２回，通級指導を行なっている。書見台や拡大読書器などを使用して「見る」ことに重きを置いた指導や機器の丁寧な扱い方の指導などを行なっている。また，各機器は，本校児童生徒にもニーズに応じて活用している。月に２回，弱視通級指導教室担当者会が開催され，他の地域制支援学校や教育委員会と連携を取りながら情報交換を行い，スクーリングや授業研究会などを行なっている。また，盲学校やライトハウス，あいあい教室と三者連絡会を持ち，指導実践の共有や意見交換を行い，専門性の向上に努めている。

3 今年度の成果と来年度の方向性

校内支援では，校内支援依頼票をわかりやすくすることができ，年度当初には，意識的に万遍なく校内の児童生徒の観察を行なった。今年度については，ＩＣＴ活用の専門家も在勤し，先に述べた通信による交流のほか，体育館に設置されたプロジェク

タで、全校集会での視覚的支援や、学校祭文化の部の舞台発表での効果的な利用を進めることができた。S Tによる摂食の評価は、栄養教諭と連携を取りながら、児童生徒の食形態に関する会議を開き、より適した食形態の給食を提供することにつながった。

今後も、高まる必要性に応じて助言を受けながら、指導者が専門性をより高めていきたい。その必要性を把握するために不可欠な各学部との連携を深めていきたい。

地域支援では、昨年度に引き続いて継続的な支援をすることで、巡回相談を行なったその時点だけの支援ではなく、地域の子どもたちの成長を見据えながら、学年や学校種を超えるタイミングで起こりうる子どもたちの「困り」を各学校園と連携しながら見守っていくことに繋がった。また、当該学校園における1つのケースが、複数のケースに繋がるなどの拡がりが見られた。相談を受ける児童館の館数も昨年度より拡がりを見せている。これまで、「学校」という場だけの子どもたちの様子に対する支援であったが、児童館という放課後の過ごし方の側面からも、子どもたちを支えることに繋がった。それぞれの拡がりを見せている地域支援であるが、これまで相談を受けたことがない学校も多くあるので、来年度も各学校園への啓発を続けていきたい。

本校および本校校区の子どもたちの困りを真摯に受け止め、子どもたちの「できる」が発揮できるよう、適切な支援を継続して提供していきたい。

おわりに

研究経過の稿で述べているように、本校では一貫して、「児童生徒は、できる状況と支援があれば『できる』存在である」ということを教育理念として掲げています。「できますシート」はこの理念に基づいて提案され、平成22年より継続して研究が進められてきました。

教職員たちは、「できますシート」を作る時や、「できます会」で意見を交わしている時、子どもたちが「できる」存在であるということを大前提として、「どうすればできるのか」「どんな状況ならできるのか」「どうしたらできる回数が増えるのか」「さらに『できる』の質を上げるにはどうしたらいいか」「今回できたことをさらに様々な『できる』につなげていくためには」等、色々と考え、自由に意見交換をします。そこで検討されているのは、一人の子どもの、一つの授業の中の、一つの行動目標です。しかし、検討の視点はどの子どもの場合にも応用することができ、どんな場面にも広げることができます。

今年度、各学部とも「できますシート」をツールとして使い、友だちや先生とのかかわり、機器を活用したコミュニケーション、家庭や地域での生活スキルに関する学習、地域の人とのかかわり等、さまざまな学習場面における「できる」を検証しました。また「できます授業」の視点を生かし、交流及び共同学習において子どもたちが「できる姿」を発揮できる取組を進めました。「障害種」「学校」「学校種」の3つの場を超えることを目指した取組の中に、「できる」を追求する視点がしっかりと根をおろしてきているという手ごたえを感じます。今後も子どもたちの継続的キャリアアップをめざしていくために、本研究の成果をさらに多様な場において生かしていく必要があると考えています。

地域に生きる一人の生活者である子どもが、今および将来、学校・家庭・地域・職場等において、意欲と自信を持って生き生きと生活し活動する姿を実現することを目指して、今後も研究を進めていきたいと思います。

今後とも、西総合支援学校への、忌憚のないご指導、ご助言をいただきますよう、心よりお願い申し上げます。

京都市立西総合支援学校
教頭 力 石 郁

平成 2 9 年度 京都市立西総合支援学校 研究報告集

発 行 日 平成 3 0 年 3 月

監修・編集 京都市立西総合支援学校

発 行 京都市立西総合支援学校
〒610-1101 京都市西京区大枝北沓掛町 1-21-21
TEL 075-332-4275 FAX 075-331-9573